

日本醫史學雜誌

第 20 卷 第 3 号

昭和 49 年 7 月 30 日発行

第75回 日本医史学会総会 } 研究発表合同集会抄録
第16回 蘭学資料研究会大会 }

原 著

- 『遠西医範』と『医範提綱』(一)……………大鳥蘭三郎…(233)
越後の蘭方医森田兄弟について(一)……………長谷川一夫…(242)
一資料から見た科学者シーボルト……………矢部 一郎…(249)
江馬塾における「扶氏経験遺訓」の需要(下) ……片桐 一男…(258)
西洋内科撰要について(五) ……………大滝 紀雄…(268)
- 例会記事……………(280)
- 雑 報……………(281)

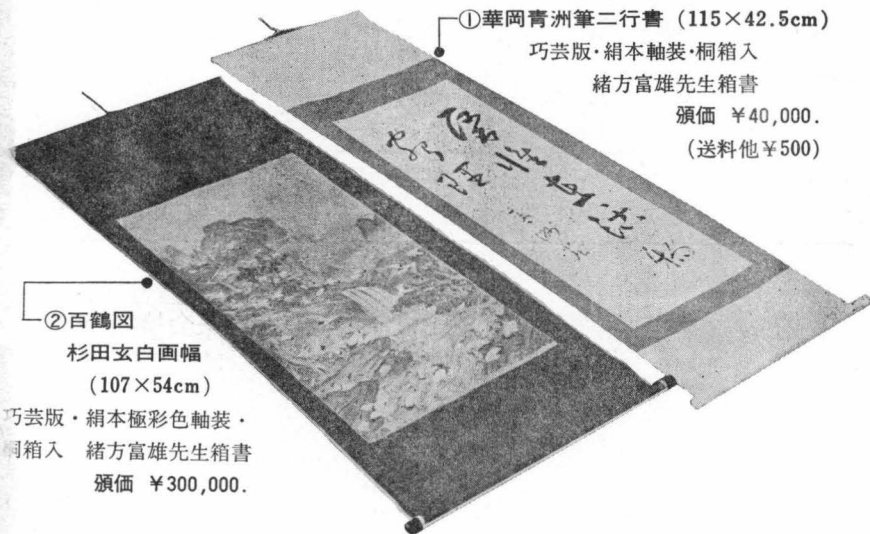
通 卷 第 1397 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2-1-1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京15250番
電話(813)3111内線544

金原出版
創業百年記念事業

医学の宝玉



① 華岡青洲筆二行書 (115×42.5cm)

巧芸版・絹本軸装・桐箱入

緒方富雄先生箱書

頒価 ¥40,000.

(送料他 ¥500)

② 百鶴図

杉田玄白画幅

(107×54cm)

巧芸版・絹本極彩色軸装・

桐箱入 緒方富雄先生箱書

頒価 ¥300,000.

わが国医学の宝玉を完全復元

好評頒布中!

醫學
杉田玄白立像

日展評議員 長谷川義起先生箱書

偉大な玄白と、似る、という二つの構成上の要素を、造形芸術として、調和の世界を彫り上げよう、昇華させようと繰返し追求して、出来上がったのがこの像である。

ブロンズ立像 (高さ35cm) 桐箱入・長谷川義起先生箱書

頒価 三〇〇、〇〇〇円



① 「活物窮理」とは生体について研究・探究することである。世界の近代外科の先駆となった華岡青洲は、「活物窮理」を外科医としての生命をかけた信条とした。

② 百鶴図は、杉田玄白が六十歳の誕生日に仕上げたもので、繊細華麗に描かれている。製作は技術の粋を尽し独自の手法により復元、仕上げ部分は手描きによる。

売捌所 / 株式会社金原商店 製作所 / 財団法人日本医学文化保存会

目次

第七十五回 日本医史学会総会

第十六回 蘭学資料研究会大会

研究発表合同集会

日時 八月十八日(日) 九・〇〇〜一七・〇〇

場所 銀座日産ギャラリー 七階ホール

解体新書以前に翻訳出版された西洋解剖書

酒井シヅ (1)

「解体新書」の「西説内科撰要」に及ぼした影響

大滝紀雄 (3)

解体新書訳業の語学的考察

佐藤良雄 (5)

解体新書と越後の国

蒲原宏 (7)

佐々木中沢の解剖と「解体新書」

山形敵一 (9)

解体新書と家畜関係書について

松尾信一 (10)

八王子で発見された「解体新書」

新藤恵久 (12)

毎年三月四日観臓記念に行われた「医家先哲追薦会」と

富士川先生作歌琵琶「蘭学創始」について

赤松金芳 (13)

オランダ航海表

大矢全節 (15)

栗山孝庵と杉田玄白及び小田野直武

田中助一 (15)

「前野良沢」寸考

末中哲夫 (16)

小塚原と山谷との管見

関根正雄 (17)

蘭学事始の研究……………	内山孝一	(19)
クルムス解剖書の脚注と「重訂解体新書」……………	大鳥蘭三郎	(22)
いわゆるターヘル・アナトミアについて(その三)序文……………	酒井恒	(23)
解体新書発刊年時フランスに於いて陶歯創造に着手その後の経緯について……………	瀬戸俊一	(25)
解体新書出版後の利用……………	石原明	(27)
享保十四年の蘭書和解「西説伯楽必携」について……………	坂本勇	(29)
小浜における杉田、中川家の新資料……………	田辺賀啓・河原朝夫・小畑昭八郎	(31)

一般講演

解体新書以前に翻訳、出版された

西洋解剖書

酒井 シヅ

吉日 阿蘭陀的伝大外科医 原三信」とある。つまり一六八七年（貞享四年）にはすでにこの翻訳が行われていたことが明らかとなった。

原三信は黒田藩の医師であり、正徳元年（一七一二）に亡くなった。長崎に学び、一六八六年に（貞享三年）長崎の蘭館医 Albert Croon から医療修業の修了証を貰っている。

ここでは原家所蔵本（以下原三信本という）と鈴木宗云が一八七二年に刊行した和蘭全軀内外分合図を比較して、解体新書発刊以前の翻訳がいかなるものであり、何故、一〇〇年近くのちに刊行されたかを論じてみた。

第15回蘭学資料研究大会（昭和48年）で「和蘭全軀内外分合図」と原本の *Pinax microcosmographicus* を比較してその所見を発表した。この時、前者が本木良意によって訳された時期を稲葉美濃守正則がこの原本とおぼしき解剖書を入力した一六七三年（延宝元年）から遠くない時期だろうと推定した。それに対して沼田次郎氏が福岡市在住の原三信氏の家に伝わる解剖図が題簽はないが、「和蘭全軀内外分合図」の刊本以前のものであることを教示された。その後、それを見る機会を得た。それには「貞享四年九月

「和蘭全軀内外分合図」という題は原本の *Pinax microcosmographicus* というタイトルを全く配慮していない。これは鈴木宗云が命名した結果と考えられる。つまり、原三信本にはこの題がついていない。また、「和蘭全軀内外分合図」の序文によれば、鈴木宗云の入手した解剖図にも題はなく、しかも、宗云は原本を見た形跡はないことから、原本のタイトルに全く関係のない題を宗云が命名した

と考えるのが妥当である。

原三信本と「和蘭全軀内外分合図」との最も大きな違いは前者には後者で欠けている図が存在し、後者で間違った位置を示す臓器が正しい位置にあって前者が原本により近い形をとることである。鈴木宗云は不完全な解剖図を入手して、それを他の西洋解剖書を参照して補足している。

解説を比較すると両者はほぼ一致しているが、前回で指摘した東洋医学的な概念へ結びつける解釈の一部は「和蘭全軀内外分合図」にだけみられる。

しかし、前回の報告で指摘したように、逐語訳でなく、訳文の順序も章の単位では原文に一致するが、それより細かくなると前後している。つまり、本木良意が蘭館医に解剖図の説明を求め、それに蘭館医が説明文を読みながら平易な言葉で解説したのを筆記したのではないかと思わせる。これに似たことが檜林鎮山の「外科宗伝」にみる。すでに岩熊哲氏の調査で、このなかの「金瘡跌撲書」だけがパレの外科書にもとづくが、両者は不即不離の関係で、抄訳ともいえないという。

即ち、解体新書の逐語訳が行われるまでは通詞が西洋医学の伝達の主役であった。そのため原書を読むよりも、蘭館医から聞き取り学ぶ方が容易であったとみるべきだ。その結果、本木良意の解剖書や檜林鎮山の「外科宗伝」が生れたが、この頃、つまり17世紀の後半には解剖書をはじめ何種類かの医書が幕府の高官の要請で入った記録が残る。しかも、それらの本についても同じような形式で説明が蘭館医によって行われた記録が残る。その説明が今日に伝わらないのは、その利用価値が低いためであったと考えられる。

本木良意の解剖書が一〇〇年近くたってようやく刊行されたのは、訳された当時、原三信と同じように写しは何部か作られて、その一部が後世に残ったためではあるが、山脇東洋の「蔵志」の発刊で西洋医学の評価が高まっていた西洋の解剖学の知識が必要であるという認識が滲透してきた結果であることはいまでもない。

(順天堂大学医学部)

「解体新書」の「西説内科撰要」に

及ぼした影響

大滝 紀雄

本邦最初の西洋内科書として知られる、宇田川玄随（槐園）の「西説内科撰要」の翻訳が終了したのは寛政四年（一七九二）といわれている。「解体新書」刊行（一七七四）後十数年を経過しているが、その間に特に注目すべき医書発行がないので、本書は「解体新書」の影響をつよく受けている。

「西説内科撰要」に現われる医語は、在来漢方などで用いられたもののほか、玄白自らが「解体新書」の翻訳にさして作ったと思われるものが、随所に用いられている。

「西説内科撰要」には、玄随がほどこした注釈が細字で多数記入されている。その中で、「解体新書」から引用した説明がひじょうに多く、二十五カ所に及んでいる。なお、「解体新書」とは明記されていないが、あきらかに同書か

らの引用と思われるもの、たとえば、「アタンキュルムスの説」「キュルムス曰く」などと記されている個所が十カ所ほどある。

解説されている語は、ウエイ（小水、汗）ブルート（血）スウェート（汗）ピス（尿）ゲール（乳糜）ゲール科曰（乳糜槽）メルケ（乳汁）セイニユホクト（神経汁）タラネン（涙）キリール（腺）スペエキセル（唾液）大キリール液（腺液）和腸、薄腸、虫腸、縮腸、厚腸等である。門脈や尿の生成の説明もある。頭旋眩冒（めまい）の項では眼の構造が詳しく書いてある。これらの説明は短いものもあれば二十数行に及ぶ長いものもある。「解体新書」からだけのものもあれば、数書を比較したものもある。

神経という概念はわが国には「解体新書」以前にはなかった。セイヌ Zenuw という訳語はあったが、神経という語は「解体新書」で始めてでてくる。いわば玄白らの創造語といえる。神経という文字は「西説内科撰要」でもそのまま使われているが、これに対する考え方は「解体新書」のそれとは異なる。当時のヨーロッパ医学界をふうびしてい

たのは神経流動説、すなわち血液循環と同様に神経液が神経の管の中を流動して全身を循環するという説である。この説はやがて誤りであることが知れ、全世界から姿を消してゆく。「解体新書」の原著者クルムスはこの流動説に対して懐疑的であったので、これを翻訳した玄白の「解体新書」もほとんどこれに触れていない。のちに大槻玄沢によって改訂された「重訂解体新書」（一七九八に翻訳完成、

一八二六に出版）では、当時の外国書の影響をうけて、こ

の神経流動説が採り入れられるのである。しかしこれに先立って「西説内科撰要」では、この説がはなばなく登場してくるのである。というのは、「西説内科撰要」の原著者ゴルテルが神経流動説の信奉者であったからにはかならない。ゴルテルを翻訳しているうちに、「玄随はこの説が「解体新書」では積極的に採用されていないのに気がついた筈である。ことこれに関して、玄随は「解体新書」よりも本説を重視した「東西病考」や「医学宝鑑」を引用している。したがって神経流動説はおそらくわが国では「西説内科撰要」で始めて紹介され、この思想が「重訂解体新書」

や「増補重訂内科撰要」に引きつがれてゆくのである。しかし、すでに述べたように本説は誤りであることが認められ、ヨーロッパでも我が国でも間もなく消える運命になる。このように、「西説内科撰要」は「解体新書」を十二分に採りいれているが、説明に都合の悪い点はこれを敬遠していたように思われる。

（横浜市）

解体新書訳業の語学的考察

佐藤 良雄

鼻はフルヘッヘンドセしものなりというから、そのフルヘッヘンドを、辞書も無きまま、良沢が長崎で求めてきた一小冊子で、木の枝を断ちたる迹、庭を掃いて集めたる塵土、それらが当るといので、うづたかく面中に隆起したものの、つまり鼻に想い及んだ。「其時のうれしさは何にたとへんかたもなく」と蘭学事始にのべているが、緒方富雄先生は、フルヘッヘンドという語は、ターヘル・アナトミアの原書の鼻のところになくて、フルヘーフェン verheven（持ちあげる）という語がある、玄白はこれをまちがっておぼえていたのかもしれないと言っている。だから、この問題は片付いたことになるが、一小冊子でしかも二つの具体例をあげて説明しているということは語学的に興味がある。伊勢物語にある塩尻という語が、古来難解とされていたの

が、天野信景翁によって、それが塩浜における砂のうづたかきものをさすから、富士山を塩尻に見立てた在原業平の形容とびったり合致したという故事をおもいおこさせる。しかも、天野信景翁は蘭学史上にも逸すべからざる和蘭船図を後世に残している。

蘭学事始には鼻のほかに、眉についても貴重な一文がある。「譬へば、眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句、彷彿として、長き日の春の一日には明らかめられず日暮〔る〕る迄考へ詰め、互〔ひ〕ににらみ合にて有りしなり」(岩波文庫本、五五―五六頁) というのがそれである。なぜ私がこゝを重視するかというに、目の上の毛といわれてもそれは眉とは限らないからである。腑分けにおいては、屍体は横たわっている。目の上の毛は睫でもありうる。之を眉と見るには直立した人体を考えねばならぬ。訳業に携わった人たちは、先哲の名にそむかず、目の上の毛といっても早合点しないで、はたも当惑して迷い抜いたということは敬服の外なき科学精神で、語学を専門と

する者もこの姿勢を失ってはならない。

終戦前に、「公論」と称する雑誌があり、学者たちの言語に関する座談会の記事をのせたことがある。ベーシック・イングリッシュから応用して、ベーシック・ジャパニズをこころみた土居光知氏であったか、少数基本語から組み立て得る単語として目の上の毛を挙げた。この語があれば眉という語は不要に帰する。そこで並み居る学者たち、桑木厳翼、穂積重遠といったような碩学たちは妙案だと感心した。それを一読した後日、桑木先生に会った私は、いちどゆっくり御目にかかりたいと申し上げ内諾を得たが、身世ともにいそがしきまま、遂に果さず、先生も故人となられた。私は、蘭学事始の人たちが目の上の毛に払った細心の注意について、哲学者である桑木先生と語りたかったのである。先生こそこの問題をわかっていただけだと思うからである。

いまや、解体新書の複製本もできた。いかなる人もこれを直接読むことができ、蘭文、さらにさかのぼって独文をもみることができるようになった。解体新書第九篇には、

睫のことも眉の事もあるが、そこにはそのはたらきをのべているので、語学的問題はそれ以前に横っている。鼻についても、面の中、口の上、額の下はその位置を論じたもので、語学的問題はそれ以前の隆起というところに存在している。フルヘツヘッドという誤記も、分詞の問題として、もういちど見直されるときが来るであろう。語学的興味というのは、常にこういうところに存するのである。

偶然にも、『眉毛眼上集』（小泉丹、昭和一六・五・三、改造社）という本が手許にある。いま言った論旨に見合った題目をとり扱っているかに見える。著者の序文をみると、眉毛横眼上（マユゲハメノウエニヨコタワル）という句からとったのだという。此五文字は、眼横鼻直の意だとあり、柳は緑に花は紅というのと同義であると著者はいう。ごくあたりまえのことを言うのだとある。つまり、眼は横に、鼻は縦にというありふれたことを意味しているにすぎないという口吻である。

蘭学事始の先哲たちが迷いぬいた眉毛眼上のことではないようである。この四二二頁にわたる大量な活字の中に、

科学者小泉丹氏の閃きが一行でもみえたならば古人に恥じない者ということができよう。蘭学事始の先哲たちは、語学者であることを自らうたっていないが、これほど精緻な且つ慎重な語学者は、そんなに多く存在しない。良心ある語学者の姿を垣間見ることのできることをよろこぶ。

眉や鼻のほかにも、到るところに訳業の箴言とすべきことがたくさんあるとおもえるので、それらを取りあつかって、二百年経ってもほろびない高邁な精神を探索してみたとおもう。(一九七四・四・三〇)

(武蔵野女子大学講師)

解体新書と越後の国

蒲原 宏

歴史上には「もし」ということが、しばしばある運命を
変えることが多い。

解体新書の成立にもこの歴史上の「もし」ということが
大きな影響を与えているのではないかと考える。

杉田玄白と中川淳庵はともに解体新書の成立に関係があ
り、かつ越後にゆかりのある人だということから、この
「もし」について「解体新書」の成立との関係を考究して
みたのである。

杉田玄白の祖父は通称八左衛門と言ひ、松平日向守忠之
の家来であったが浪人となった。玄白の父、甫仙は越後国
新発田藩主溝口信濃守に仕え二百石二十人扶持を給せられ
る医師であった。

藩主の小刀の鏝と甫仙の円顛とが憂然とうちあたり、甫

仙に対して溝口候が陳謝されておれば、杉田甫仙は新発田藩を退去することがなかったはずである。候の過失を臣下のものとして黙殺されたために、慨然として甫仙は「仕ふるべき候にあらざ」と新発田藩を去った。

杉田玄白が安永三年と文化八年の両度、酒井家に差出した由緒書にも「甫仙儀溝口信濃守城下で二百石二十人扶持被下相勤候処存寄御座候に付暇申受浪にて罷在候処、酒井忠圍様御代元禄十五年三御門御普請御手伝蒙仰候節当分御雇被成相勤云々」とある。甫仙新発田退去の逸事も新発田藩世臣譜の中に記録されているので口碑のみではないと考えられる。「もし」玄白の父甫仙が新発田藩を藩主との確執によって退去することがなければ、玄白の小浜藩酒井候の被護のもとにおける蘭学研究も生れてこなかったであろう。解体新書成立の機会もなかったかも知れぬのであろう。中川淳庵の曾祖父中川玄庵は越後国高田藩松平越後守光長の家臣で、玄庵の父仙圭の代から二百石取の医師として仕えていた。明暦三年五十石の加増を受けたが、玄庵の代となってから、延宝八年に病身の故をもって越後高田藩を

辞して郷里の丹波国桑田郡馬路村に帰った。

天和―延宝年間の「越後家分限帖」に中川玄庵の名は記載されていないが、弟の助左衛門の名が一般家士の中に記載されている。

この原因はいわゆる越後騒動によるものかも知れないが、家禄を弟にゆずって越後松平家を去ったのであろうか。

中川淳庵が安永三年と文化八年に酒井候に提出した家の由緒書に記載されているところであって、「もし」曾祖父の玄庵が越後松平家を退去しなかったなら、淳庵の酒井家への仕官はなかったであろうし、蘭学・杉田玄白はじめ、「解体新書」出版事業への参画の出会いもありえなかったかも知れぬのである。

これまで越後にみられた解体新書の所持者と現物の調査により、高田地方に二部、五泉地区に一部の既刻「解体新書」と、加茂町の蘭方医森田千庵が手写した「クルムスの解剖書」について調査考究したところを報告する。

(県立ガンセンター新潟病院)

佐々木中沢の解剖と「解体新書」

山形 敏一

明和八年（一七七二）三月三日千住小塚原の刑屍解剖が契機となって、安永三年（一七七四）公刊された「解体新書」はわが国において西洋医学の優秀性を認識させたものであった。

文政五年（一八二三年）三月仙台藩医学校の外科教授として着任した佐々木中沢は、六月二十九日七北田の刑場で女の囚の解剖を行ない、「存真図腋」一巻を著わした。

これは桂川甫周の高弟で淀藩医官であった南小柿甫祐の四十余体の剖屍例を写図した「存真図」二巻に欠けている婦人生殖器を図示した、これらの解剖的事項を解説したものである。

佐々木中沢は文政二年（一七九九）十月著述された「存真図」に大槻玄沢らとともに跋文を書き、杉田玄白の「解体

新書」の精確なことを賞讃するとともに、蘭学者は解剖を重視すべきことを述べているから、中沢はすでに大槻玄沢の芝蘭堂にいた頃から自ら解剖しようという志をもっていたことがわかる。

「存真図腋」には学頭渡部道可の序文と内科教授渋谷順安の跋文があり、仙台藩の官庫におさめられた。

しかるに、当時仙台藩医学校の産婦人科教授であった佐々木中沢は専門の立場から友人新妻雄記に精細な写図をつくらせ、これにかんたんな解説を加えた「解体補義」を著述し、家蔵していたことが最近明らかになった。

その序文をみても、これらの解剖および著述が「解体新書」の刊行によって触発されたものであったことがわかる。したがって、「解体新書」の刊行は単に西洋医学の精髓を知らせただけでなく、実証的な近代医学の確立に貢献したことは明らかである。

（東北大学医学部教授）

解体新書と家畜関係書について

松尾 信一

我国最初の馬体解剖書である、菊池東水の解馬新書（嘉永五年・一八五二年）は、オランダの馬術叢説の中の腸の記載等が詳しいことに、強く刺激されて、自分で馬を解剖してみたり、解体新書等を参考として、著作されている。その概要は既に報告した（蘭学資料研究会研究報告第二五九号・一九七二年）

今回は解体新書発刊前後の頃の、我国の家畜関係書について、解剖学的記事と、去勢等について報告し、末尾に、家畜関係書で「新書」と名称のついている書名を記す。

当時の馬の解剖の知識。一九七二年、長野県駒ヶ根市の旧家の土蔵から、安西流の馬医巻物一本が発見された。この巻物は、宝永七年（一七一〇年）に写されたもので、原本は天正七年（一五七九年）と記されている。内容は安驥集の

系統に属する、馬の解剖と治療についての図説巻物であり、仏教と陰陽五行説を根幹としている。内臓は人体と同じく、五臓六腑の図等が示されている。ところで、寺島良安の和漢三才図会（正徳三・一七一三年）には、馬には胆なしと明記され、そのため馬の肝臓には大毒があり、食べられないと記してある。事実、馬には胆嚢は存在しない。

しかし、肝臓は食用になる。又、大坪流の馬書（寛文六年・一六六六年）の馬の解剖図は、前記の安西流馬医巻物の解剖図よりも、実証的な感じを受けるが、五臓六腑の域を脱していない。当時の馬の解剖等の知識は、以上のような状態であったものと考えられる。

オランダの馬書等の影響。一方、江戸時代將軍吉宗の頃、オランダの馬術家ケイツル（Hans Jurgen Keyserling）が来日し、通詞、今村英正が翻訳した、西説伯楽必携（享保十・十二・十四年・一七二五・一七二七・一七二九年）という書物がある。この書物は、紅毛人馬術御尋記、紅毛馬書ケイツル、紅毛馬書補遺ケイツル、阿蘭陀馬乗方聞書、阿蘭陀ケイツル馬術和解、阿蘭陀馬療治方薬方の事、馬疾療法

(オランダ馬療治之本和解) 紅毛人馬術御尋記等が含まれている。これらの書物の中には、五臟五腑の記載はあるが、胆嚢については明確でない。又、脳を包む薄膜あり、これを「ムードルフリース」ということ。血脈運行は、心臓におこり、全体に流れて、また、心臓に帰す等のこと。臓を

割見するという用語が記されている。次に、堀好謙訳のオランダ馬書上下写本(オランダ林歎斯原著、時代の明確なる記載なし)には、腸は小腸と大腸に区別し、小腸は更に、十二指腸、空腸、廻腸の三部に、大腸は、盲腸、結腸、直腸の三部に分れていると記し、その長さも正確である。馬の胃は呕吐することができないが、これは、食道から胃に移るところの構造のためであるとし、「カラップフリース」や閉合筋等の名称を使用している。内臓については、「解剖」という言葉、その他、頭蓋骨という語もある。本馬書内容は、解剖ばかりでなく、馬学書としても、当時、非常に高度のものである。本文中の引用年代は、一六三一年(寛永八年)から一七六一年(宝暦十一年)までである。腸の区分の名称は、宇田川玄真の和蘭内景医範提綱(文化二年・一八

〇五年)の用語と同一であること、天保四年(一八三三年)の長崎の分限帳の中に、堀専次郎(好謙)が記されていること。本馬書は、解馬新書に引用されていること、以上の諸事実からみて、堀好謙訳オランダ馬書は、一八〇五年以降、一八五〇年以前のもので考えられる。

我国では、古来、馬や動物の去勢は行なわれなかった。しかし、本草綱目や和漢三才図会には、騮(馬の去勢のこと)が記されている。前記、西説伯楽必携には、オランダでは一才から一才半の牡馬の陰嚢を切ること、そして馬が温和になり、使用しやすことが記されている。堀好謙訳の馬書にも、牡馬の陰嚢を切断すると、静かになり、諸事の便に甚好し。陰嚢を切りたる馬と牝馬は声が柔和になると記してある。馬の去勢については、大槻玄沢の扇馬訳説(文化五年・一八〇八年)の記載が最も詳しい。

「新書」と名称のついている家畜関係書。

解馬新書(嘉永五年・一八五二年)

鞍鏡新書(年代未詳、一八一五—一八七〇年の間)

馬療新書(元治元年・一八六四年)

牛病新書（明治七年・一八七四年）

羊病治療新書（明治七年・一八七四年）

家禽新書（明治三年・一八九〇年）

实用牧草新書・畜産学講習新書・日本馬耕新書（年代未詳）
等がある。

安西流馬医巻物については、信州大学農学部、高橋成直助教授に、堀好謙の年代、および阿蘭人馬療治方薬方の事、阿蘭陀ケイツル馬術和解については、長崎市立博物館の越中哲也氏に、お世話いただき、感謝の意を表します。

（信州大学農学部助教授）

八王子で発見された「解体新書」

新藤 恵久

昨年十月八王子市の北東・多摩川のほとりで「解体新書」が発見された。八王子周辺は幕末、蘭学が盛んで蘭書の複製など行われたが「解体新書」の発見はこれが最初である。

本書のあった関根家は天正十八年、八王子城の落城とともに、武州多摩郡粟ノ須村（現八王子市小宮町）に居を定め農業のかたわら代々名主をつとめていた。江戸中期になると御用商人として多摩川を筏で下ってくる材木を江戸に納めていた。

当主、関根貞三氏の祖父嘉門（一八二二—一八六九）は十六歳の時家を出、徳本流四世磯野弘道（当家御用留による）の門人となり徳本流五世を名乗り自宅で開業した。慶応三年、京都典薬寮の医師となりこの頃蘭学を学んだらしい。

明治維新となつてから緒方惟準や大学東校にも関係した。

(当家御用留より) 当家にはこの他「解臈凶賦」「蘭方枢機」

があり又多数の古医方書、処方録と共に徳本流の奥儀書、

梅花無尽蔵、療治十九方、葉方帳、磯野弘道の書簡等も現

存している。

なお嘉門の子小膳は、権田直助の門人で、浅田宗伯らと

共に明治十六年私立脚氣病院「関根」の設立を計画した。

(八王子市)

毎年三月四日観臈記念に行われ

た「医家先哲追薦会」と富士川

先生作歌琵琶「蘭学創始」につ

いて

赤松 金芳

富士川先生の提唱によって結成された私立奨進医会の主
催で、毎年三月四日観臈記念日を期して医家先哲追薦会が
行われた。

その第一回は明治二十五年三月四日に「先哲祭」として
開催されたが、その三月四日に行うに至った趣旨について
は、『明和八年三月四日前野杉田の諸先生、江戸小塚原に
於て観臈の挙あり……、この三月四日は我が実験的医学を
奉ずるものの念に記して忘るべからざるの日なり』という
「先哲祭の詞」によって明らかである。

そして第二回よりは「医家先哲追薦会」の名で明治二十
六年以降昭和三十四年に至るまで五十八回にわたって開催

された。

そして、毎回、前野蘭化その他先哲肖像を揚げてその遺徳を称揚し、殊にその第三十回大正十年には覬臈百五十年記念として、前野、杉田、中川、桂川諸先哲の遺著遺墨を展覧するとともに翌十一年には南千住の回向院に覬臈記念碑が建設せられる。

私立奨進医会が日本医史学会と日本医師協会とに分離した後、主として日本医史学会がこの会を継承して開催した。そして昭和二年（第三十六回）には富士川先生作歌に係る琵琶「蘭学創始」が演奏された。富士川先生歿後も引つづき開催されていたが昭和二十四年を以て医家先哲追薦会は一応終止された。

しかし、その後をうけて昭和三十一年から同じく三月四日に「蘭学事始記念会」として開催され、昭和三十四年には日本医師会、日本医学会、日本医史学会の手によって戦災をうけた覬臈記念碑も再建せられ、更に蘭学創始地記念碑も出来、また昭和四十年には蘭学事始百五十年記念会、同四十六年には小塚原附分二百年記念講演会なども行われ

たことは周知のことである。

このように、三月四日またはその前後に医家先哲追薦会の終止後も、幾多の会合の行われたことは、それが医学または蘭学に志ざすものにとって忘るべからざる日であるためであると思う。

最後に、富士川先生作歌琵琶「蘭学創始」について述べる。
(京浜女子大学)

オランダ航海表

大矢 全節

一六二一年以来、オランダ館が平戸に開設せられたが、一六四〇年ヤソ教布教の禁制が一層きびしくなって追放されたポルトガル人のあとを引継いでオランダ人は長崎出島に移住することになった。それ以来、オランダ本国から多くの人々や物資が船で以って長崎出島に運ばれて来た。

本航海表は一八一六年に Jacob Swart によつてアムステルダムで上梓された著書の第三版である。

航海術の水準を知る貴重なる資料と考えられると共に、当時舶来の洋書ならびに医学者たちの日本への渡来の舞台裏の役割を知る手がかりとも思われる。

(京都市)

栗山孝庵と杉田玄白及び

小田野直武

田中 助一

杉田玄白（一七三三—一八一七）は若狭国小浜藩医であり、小田野直武は秋田藩士で西洋画家でもあって、安永三年（一七七四）八月玄白が刊行した「解体新書」の付図は直武が毛筆で描いたものである。

栗山孝庵（一七二八—一七九二）は長州萩藩医であり、七代藩主毛利重就と八代藩主毛利治親父子の侍医として、参観にしたがって六回江戸に行っている。そして江戸滞在中には杉田玄白と交際し、対診したりしているが、後年「関西の名医」と思い出に書かれている。

玄白は二十三歳の時、宝暦四年（一七五四）春同藩医小杉玄適から、山脇東洋等がはじめて京都で人体解剖を行ったことを知らされた。そのうち宝暦八年と翌九年には東洋の高弟の栗山孝庵が萩で解剖を行ったので、このことも恐ら

く解剖に関心の深かった玄白の耳には達したことと思われ
る。

安永八年十月三十日に平賀源内から栗山孝庵に出した書
簡（早稲田大学図書館所蔵）によると、源内は小田野武助
（直武）の画二幅を孝庵に贈呈して居り、武助の画は自分
が指導したものであることをのべ、茶道や和歌・書画等に
趣味が多かった毛利重就に御目にかけて貰えることありがた
いといっている。同時に源内は自分が指導した讃岐の志度
焼の宣伝や、緬羊を飼育して羅紗を織ることをもすすめ
居る。しかし源内は不幸にして三週目にあやまって人を殺
傷し、獄中で破傷風にかかって死んだために、目的を果す
ことが出来なかった。

孝庵が源内から貰って帰った武助の画はどんなものであ
ったか現在明かでないが、わが国医学発展の先覚者であつ
た孝庵や玄白や武助や源内等は、奇しくもこのように眼に
見えない糸でつながっているのである。

（萩市）

「前野良沢」寸考

末中 哲夫

前野良沢の性格・思考・翻訳活動などに関する先学の業
績は多い。これらの成果を参照するとともに、良沢の晩年
に至るまでの執筆活動の実態に検討を加え、さらに子弟の
業績との関連においていささか私見をのべたい。

（近畿大学教授）

小塚原と山谷との管見

関根 正雄

『蘭学事始』に杉田玄白は腑分の観臓に赴くとき、前野良沢らと「浅草三谷町出口の茶屋で」待ち合せたとある。そして「これより各々打連れ立ちて骨ヶ原の設け置き観臓の場へ至れり」とかいている。

三谷は古く「三屋」として始まる地名である。元禄年間『西鶴置物産』のなかでは「三野」とかかれ、そのあと『近世奇跡考』『柳亭筆記』などではすべて「三谷」とかかっている。「山谷」とかくことは江戸末の『武江年表』『江戸名所図会』などに表われ、その頃の近吾堂『江戸切絵図』には両方とも使われている。

「三谷町出口の茶屋」が現在どの地点であるか、にわかには断定し難い。しかし、明和版『江戸図』では三谷町以北は田地であるし、『江戸繁昌記』では「由下宿至山谷間人

戸中斷一面田野」としている。明和五年吉原火災のあと、遊女屋仮宅が付近五カ所にできて、そのなかに山谷があげられている。さらに安政版『江戸大絵図』では、小塚原に近く「茶や」の文字が小さくのる。その先きには今「涙橋」の地名が残っている。かようにみれば、現・台東区清川一・二丁目境の十字路の地点がそれらしい。

「骨ヶ原」は小塚原の異称である。地人はすべて（コツカッバラ）と発音する。河出書房『日本歴史大辞典』ではこつかっぱら」と出し、記述上では「小塚原」とかいている。千住遊廓のあった頃、人々はここを（コツ）と云った。「骨ヶ原」とかくことが出土する人骨と関係することは当然であろうが、地人の発音も関係したものと思われる。

小塚原は『新編武蔵風土記』によれば「古く小岩原、古塚原なども云へり」とある。『江戸名所図会』では、千住大橋に近いすさのお神社社伝に「一堆の小塚あり、この塚によりてこの地を小塚原と号せり」という。また、浅草から千住にかけては、源義家の営んだ塚に関する伝説が残り、補陀山円通寺（南千住一丁目）の享保造立の石塔碑文に

「……還送賊首四十八埋觀音原、築四十八塚、今喚曰小塚原」と刻されている。

小塚原は荒川右岸にあつて、明和の頃は東は浅茅原に接し南は浅草三谷につづいた。現在海拔一・四米でこの辺りでは最も低い。従つて古くから頻ぱんに洪水に見舞われ、元和六年には待乳山下から箕輪(のちの通新町)にのびる日本堤が築かれた。この堤外にある小塚原は、大正十二年荒川放水路が開通するまで習慣的な水害をうけていた。文政六年には熊谷堤の決潰で小塚原地蔵尊の膝の上まで出水し、弘化三年には権現堂川のはんらんで地藏尊の肩の高さに出水したという。

小塚原町は千住宿の下宿である。千住本宿は荒川左岸、現在の北千住である。本宿を結ぶ千住大橋は、すでに文禄三年伊奈備前忠次の奉行で荒川に架橋している。万治三年「小塚原町中村町の加宿」願いが本宿から提出されている。千住宿は奥州街道の起点であり、日光街道の起点でもある。千住宿から下野小山新田まで同じ道路が使われた。千住宿のなかで小塚原町には駅馬の設けがあつた。

江戸市中から小塚原町に至る道路はふたつある。そのひとつの隅田川寄りの道路は、浅草橋御門から蔵前・駒形を通り、浅草花川戸から聖天町を過ぎて三谷を通り小塚原に至る。ここに南の鈴ヶ森に対する北の小塚原「仕置場」がある。慶安四年の頃、浅草新島越から移されて、それ以来明治十二年梟首刑廃止に到るまで続いた。「仕置場」に近く「火や」があつた。そのあたりの新町に、正保二年以来浅草弾左衛門の囲いがある。その当主は世襲で皮革・芸能などに関する業者を配下とし、江戸町奉行から罪人の極刑執行を托されていた。またその地の非人頭車善七は配下の非人に雑芸・清掃などを勤めさせ、また罪人所刑の補助作業を命じられていた。善七は非人溜を管理し、身分刑受刑者や病囚の収容も依托されていた。この両者は夫々の『由緒書』を持ち、その先祖の由来と中世以向の為政者に対する奉仕の数々を強調している。

小塚原回向院は、仕置場に隣接し、寛文七年、兩國回向院持地に建立された。江戸地図にはその位置が示されていない。罪人の埋葬であつたため、地図の記入を差しひかえ

たのであろう。文化十三年『世事見聞録』によれば「御当代御仕置のものは死刑以上三百人に及び牢死人年々千人以上と云ふ。又首縊投身自殺其外変死のもの千人已上、行倒れと唱るもの千人已上」とある。明治二十三年『幕府刑事図譜』序文によれば「天保年間より五十有余年毎年千人以上二千人以下の処刑」とある。死体埋葬の深さ三尺と規定されても、事實はさらに浅いものごとく、洪水は泥土を積もらせることなく却って地表を洗い、『蘭学事始』には「刑場に野ざらしになりし骨どもを拾ひとりて」と述べられている。

(群馬県太田市)

蘭学事始の研究

内山 孝一

蘭学事始というのは、わがくに西洋文化がオランダによって伝来したはじめのことである。具体的には、前野良沢・杉田玄白・中川淳庵などによって和訳出版された「解体新書」(安永三年、一七七四)である。今から丁度二百年前であり、記念の年にあたる。

蘭学以前、一五四三年(天文十二)にポルトガル人が種ヶ島に来航し、次いでスペイン人も来朝した。さらに一五四九年(天文十八)に Francisco de Xavier が鹿児島に来朝し、切支丹宗と切支丹文学をはじめ、南蛮流外科という西洋の医術が伝えられた。この南蛮時代は一五四三年から一六四一年(寛永十八)までの約百年の間である。

切支丹の布教が行われ、わがくに根をおろしたが、島原の乱のような事件もあり、弾圧と鎖国政策が行われ、日

本の信者をはじめ多くの南蛮人も殺され、ポルトガル人とスペイン人は追放され、切支丹は嚴禁された。

しかし、例えば宣教医 Luis de Almeida によって病院が建てられ、無料で南蛮医療により診療が行われた。この南蛮時代に代ってオランダは新教の国であるので来朝するようになつた。

南蛮もオランダも貿易を主としたのであるが、西洋の文化としてキリスト教と医療が伝えられた。オランダとの關係は明治維新一八六八年以後もしばらく続いたから約二三十年の長期に亘っている。しかし蘭学者と呼ばれる人々にもはげしい弾圧が行われたこともあった。南蛮渡来から明治維新までの約三百二十五年間に亘って西洋文化が伝来したことになる。

その間にあつて J. A. Kulmus の *Tabulae Anatomicae*, 1731 の和訳がなされ、解体新書が出版されたのを、きっかけとして、諸種の学問の本の和訳がなされ、蘭学時代といつてよいほど盛んになつた。

このようになったのはなぜであろうか、医学に限つてみ

ても、蘭学以前に東洋医療により診療していた人の間に、人体の構造機能についての疑問がもたれていた。それを明らかにするため、例えば山脇東洋は京都で人体解剖を觀、河口信任は同様に京都で自ら人体解剖を試みている。オランダの本の図と實際とを比べて、オランダと日本とは遠い国であるのに、それにも拘わらず、全くよく一致することを明らかにしている。

このような機運の時代にあつて解体新書が出版されたので、解剖学だけでなく生理学、内科、外科、小児科などの本が和訳され、また化学、植物学などの本も和訳されるようになった。このようにして蘭学時代は一七七四—一八六八年の約百年の間続いた。しかしこの時代にも東洋医療の診療は行われていた。これは東洋医療の診療は永い年月に亘る經驗にもとづくものであり、今では少数の人によって行われているのみであるが、大切なものを内蔵している。杉田玄白も診療には東洋医療によつてゐる。

ポルトガル人の来朝した一五四三年は西洋ではルネッサンス時代で、この年に N. Copernicus の地動説を記した

「天体の運行について」と A. Vesalius の「人体の構造」の本が出版された年である。大宇宙と小宇宙といわれる人体についての創造的研究の成果である。

このように西洋の文化創造が日本に伝来したが、ルネッサンス時代の宗教改革（一五一七）は伝来しないで反対運動（一五三八）の立役者ザビエルが来朝したので切支丹が伝来した。

東洋文化は奈良時代に伝来し、永い間に亘って日本文化にとり入れられた。そこに新らしく蘭学によって西洋文化がとり入れられる道がひらかれた。ここに重要な意義がある。東洋文化の伝来以前から日本文化はあったから、外来文化をとり入れることができたと思う。しかし東西文化の伝来により日本文化は著しく発達したことはいうまでもない。

なお蘭学時代にも獨創性のある研究がある。例えば外科の華岡青洲、産科の賀川子玄とその流れ、生理学の伏屋琴坂と同志の人々の研究などを挙げることができる。

明治維新の後には、医学ではオランダからドイツ医学を

はじめとしてイギリスの医学なども急速に伝えられ、著しい発展をした。第二次世界戦の後にはアメリカの医学が急速にとり入れられた。これを考えると、蘭学事始が西洋文化伝来のはじめをなすもので、日本の文化史の上からも重要な意義があるといつてよいであろう。

今後の日本文化の発達は、これを医学に限って見ると、東洋医療の研究と西洋医学の発達によると同時にそれらを根柢として日本において獨創性のある研究の進展が期待されるということが出来る。

クルムス解剖書の脚注と「重訂解

体新書」

大鳥蘭三郎

『解体新書』は杉田玄白たちが、主としてクルムス解剖書、Anatomische Tafellen の蘭訳版“Ontleedkundige tafelen”を訳述した、まさに画期的な書物であることはいうまでもない。しかし、はじめてのころみであっただけに、厳密に言えば『解体新書』の出来ばえは十分とはいえぬものが多かったのは一面からいえば無理からぬところであった。

杉田玄白もこのことはよく心得ていて、高弟の大槻玄沢に『解体新書』の改訂を命じたのである。『重訂解体新書』はこの師命にこたえた結果であったが、玄沢はこれについて、その附言のなかでつぎのようにいっている。

「但其起功之初。參攷少書。質問乏人。不便稽証。無由三研究。以故其誤有未三展暢者上。雖時加參訂。

其功未レ半。而衰老日逼。人事旁午。因循不レ果。深以為レ憾。因更命ニ小子茂實。代三訂正之任。茂實不敏。固無ニ學識。安敢勝ニ其仔肩。雖然師命之重。附囑之辱。誼不レ可ニ以固辭。於是乎。重取ニ原書。反復玩味。審稽ニ正文。細搜ニ註証。考ニ索群書。旁ニ羅百氏。又屢レ解体。以徵ニ諸実景。敢奮ニ編摩之志。叨借ニ紹述之權。歳歴ニ十稔。稿凡ニ三易。雖レ非ニ大成。庶幾粗レ備矣。借レ名曰ニ重訂解体新書。豈敢恢ニ弘苗緒ニ云哉。亦唯仰繼ニ其志ニ而已。

この文のなかで、「細搜ニ註証」と玄沢がいつている「註証」とはクルムス解剖書にある脚註のことで、『解体新書』ではすべて省略されている。玄沢はこの「註証」を「こまかに搜り」というのである。

そこで、私は玄沢がクルムス解剖書の脚註をどのように取扱っているかを知るために、クルムス解剖書の蘭訳版の脚註について調べてみた。ここではその結果を報告し、玄沢が『解体新書』にどのように「重訂」を加えたかを知る一助としたいと考えた。

いわゆるターヘル・アナトミア

について(その三)序文

酒井 恒

いわゆるターヘル・アナトミアの序文は、蘭訳者 G. Diction が恩師 B. S. Albinus にやちげりる文 六ページ、訳者 G. Diction の序文 十二ページおよび原著者 J. A. Kullnus の序文 四ページの三部より成る。

第一部では、訳者が解剖学の教えを受けた恩師に対する報恩感謝の気持が行間に満ちあふれている。Albinus は、医学の修業においてはきびしい反面、学問的には訳者をよくかばい、そこにはあたたかい師弟関係があった。それが訳者をこの事業に邁進させたのである。それを、最も文明の開けた国民でさえも、彼らの最初の収獲を、多少とも恩義を受けたものにささげるのであると表現し、訳者の尊敬と感謝の気持のしるしとしてこの書を恩師にささげる旨を述べている。最後に、神に対して、恩師の健康を祈り、恩

師の仕事の発展、更に、それが解剖学と医学の繁栄と確立に貢献することを願っている。

訳者の序文の中では、解剖学が医学および治療学の主要な柱であることを力説している。当時、一部には、解剖学の知識は不要であるとの意見があり、また、学識(理論)を軽んじ、技術(経験)を重んずる風潮が全般的に、特に上流社会に強くみられたが、これに対して激しく反論し、いくつかの例を挙げて、解剖学が主として外科医に如何に重要なものであるかを説いている。すなわち、体表の部分の知識が医学において重要な事項ではあるが、その下にある脂肪膜には炎症、腫脹、化膿が起り、その切開には解剖学の知識が必要であり、最もおそろべき出血に対しては、血管の位置、太さ、走行についての知識が必要であり、筋の知識が創傷、手術による運動障害の防止、治療と密接に関係し、内臓の知識により創傷の致命度を知ることができると述べている。原著の蘭訳を志した理由として、当時、他の国では既に知られていた発見等も、オランダ語で書かれなかったためにオランダでは知られずにいた

こと、そのためにオランダの有能、且つ、勉強好きな外科医も医学徒もおくれをとっていたこと、また、原著の記載も図も理解しやすいものであったことにより、原著の蘭訳は外科医にも、医学徒にも、すこぶる役にたつものであると考えたからであると述べている。また、当時の外科医、医学徒は、既に用語としてラテン語を用いていたので、これを附記することにより、理解をいっそう容易にしたのである。訳者は本書が医術に役だつことを信じつつも、誤訳に対する世の非難をすこぶる気にして説明を加えている。最後にこの仕事が不幸な人間を救うことに役立つことを念願している。

原著者の序文により、本書が増補改版された第三版のことであることがわかる。原著が書かれた理由として、当時、解剖学の満足すべき指導者がいなかったため、原著者が、初めは、自分の聴講者のために本書を計画し、解剖学を学ぶ初学者に必要な知識を、数少ない表にまとめ、各表では臓器の定義、位置、形状、構造、構成部分等をまとめて一覽しやすくして、思考に便ならしめたのである。こ

の版では、図の配列、大きさを變え、自筆の図をも加え、註訳を増補し、更に記載も頭から胸、腹へと、自法の順に従って、医学校の自習に便ならしめた。第二十一図の誤りを訂正して、正確な記録図が正しい判断には必要であることを力説している。最後に、驚くほど巧妙に造られ、神の叡智のひらめきと、全能の神が光り輝く人間のからだを共にみつめてみようかと結んでいる。

本文では序文がひときわ難解である。それは各文がきわめて長く、代名詞、あるいは関係代名詞の先行詞が何であるかを決定し難い部分が見られるからである。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

解体新書発刊年時フランスに

於いて陶歯創造に着手

その後の経緯について

瀬戸 俊一

欧州にては古代より義歯用として動物特に象牙牡牛の脛骨河馬の歯牙等が加工し利用された。我国にては徳川初期の頃牛骨黒檀白檀黄楊木蠟石等が用いられたが陶材の如き物質ではなかった。鉦物性歯牙製作に手をつけたのは一七〇一年フランスの *Guilleméau* で白蠟に乳香を加えたものであった。後パリの薬剤師 *Duchateau* である。彼の義歯は河馬の歯牙を用いてあり薬品による汚染と悪臭に悩まされ一七七四年パリの陶工 *Guerhard* に依頼し、世界に於ける最初の陶材による陶歯創作に着手したのである。この年こそ日本に於ける解体新書発刊の年に相当するわけである。勿論これは着手した時であって完成までには相当の年月を要したことは当然である。原型が窯焼後収縮し過ぎ

たり、また大き過ぎたり、長短のバランスが思ふにまかせず幾度か失敗に失敗を重ねたわけである。

色も天然歯よりも白色に近く実用にほど遠いものであった。黄色をおびさせるため第二窯焼も行ったが成功せず、高度計にて二二〇Cと二五〇Cにて焼く陶材を利用してもみたがそれとも充分ではなかった。そこで臨床歯科医である *Nicholas Dubois Chemant* に相談しその専門的知識を充分取り入れることとした。その結果彼等は陶材中に煙管泥と着色土類の一定量を混和した糊剤を作り、今までより一層低温による窯焼を試みることにより漸く実用化への道に曙光が見出され始めたのである。この陶歯は未完成のものではないのにも拘らず歯科医でない *Duchateau* は事業化し忽ちにして失敗した。そして一切陶歯の仕事より手を引いたのである。唯その製造法のみはパリ王立科学翰林院に報告し賞讃を博したこのみ記録された。*Chemant* はこれに改良を加えフォテンブロウ、サンド、アリカンド、リーダ、泥灰石、赤色酸化鉄、コバルトを混合し、収縮色扱等は初期の目的を達するに至った。彼は一八八九年陶歯

製作法をパリ王立科学翰林院並びにパリ医科大学に報告しルイ一六世より特許権を獲得した。この特許については発案者である Duchateau パリーの多数の歯科医、侍医 Foucou 等が無効の訴を起したが、裁判所では Duchateau が一時この仕事を放棄し約一〇年を経過した事実に基づき Chemant の勝利と決定したのである。パリーの革命後彼は英国に渡り一七九二年より二五年間陶歯の優秀さを出版物として宣伝した。然しこれとてもやはり揺籃期であり、Foucou, Fonje 等フランス人による改良が見られ、英国にては宝石商の Claunchius ash が一八一四年に歯科医 Thomson に依頼し陶歯製作に着手成功今日の大会社の基礎を築いたのである。

欧州からアメリカに渡ったのには諸説あるが一八〇七年 John Green Wood (1760~1819) 実験のためアメリカに持ち帰ったという記録がありその後 Aaron Burr から Fonje のものものを貰ったという。実用的としては一八一七年フランスの歯科医 A. Aplanton がパリよりフィラデルフィアに持参し開業に応用したのが米国での最初といえよ

う。その形色材質は全く素雑であり前歯は割れた豌豆の如く唇面は円く舌面は平坦であった。この平坦面を横切つて縦に半円に溝があり各側に白金の薄片が挿入してあった。この溝は金線の薄いためでその廻りに白金の尖端を突込み金属の上に金属の接合物が流されてあった。かくして金線は歯牙にとりつけられてあった。

一八二五年米国フィラデルフィアの Samuel W. Stockton が着手五年後売出されたのである。後、彼の甥が John White and McCurdy という会社を作り、今日の S. S. White. Co と発展した。現在では陶歯歯科材料諸器械総べてに涉り最も優れた製品を世界に送り出している。

日本に於いては一八九〇年渡辺良斎が陶歯製作に付専売特許を得ている。同氏は翌年蟻孔を有する陶歯を作り、同年末洋銀鋳陶歯を作つて特許を得ている。その後二年を経て陶歯焼用マッフルと歯頸部焼量を見る陶歯等による特許を獲得した。

事業化としては松風陶歯製造株式会社を一九二二年京都に創立し今日に及んでいる。その盛業振りは東西両洋に響

き見るべきもの多大である。また他にも数社これに劣らぬ会社のあるは我国齒科業界の喜ぶべき現象である。

むすび

このたびこの講演を紹介する所以は陶歯創造年代が解体新書発刊の年に相当している。陶歯創作は齒科医学発達史上重大事実である。本文当初に述べた通り古代欧州にては義歯用として河馬の歯牙象牙牡牛の脛骨、日本にては黒檀白檀黄楊木蠟石であった。この年に至り世界最初の陶材による陶歯創作に着手したことは注目すべきことであり、現在なおこの流れを汲んでいることは忘れてならぬ事柄である。

解体新書出版後の利用

石原 明

「解体新書」は周知の如く、安永三年（一七七二）八月に公刊された。本文四巻、図一巻の五冊であるが、杉田玄白らが翻訳を志してから、わずかに三年半ばかり。原稿のほぼ成ったのは一年半にみたない。

わが国空前のしごととしては驚くべきスピードであった。翻訳についての苦心談は杉田玄白の回想録である「蘭学事始」の中にくわしいが、「解体新書」が公刊されてからその後、どのように利用されたかという点については詳しい記録に乏しい。京都の小石家ではこれをテキストに講義したといわれるが、原資料は残っていない。

クルムス解剖書のジクテン蘭訳本の本文のみを訳して漢文とした「解体新書」は、原文と訳文を比較してみるとかなりの誤訳や思い違いのあることは当然であるが、それは玄白の語学力の不足とばかりは責められない。玄白自身そ

のことを痛感して、完全訳を高弟の大槻玄沢に囑した。玄沢の改訳増補になる「重訂解体新書」は、寛政一〇年（一七九八）に脱稿したが公刊されたのは文政九年（一八二六）になった。

ここでご紹介する資料は横浜市大医学部分館にかつて寄贈された鈴木文庫の書入本である。初版の「解体新書」に加筆された内容から、「解体新書」が刊行いらいどのよう利用されたかを推測する傍証となるであろう。

まず巻頭から、吉雄耕牛の序について、中国古典の出所をすべて明記し、クルムスの序についてもかなり註を加えている。中について「橋本云」とある朱書は明かに橋本曇齋の意見と認められ、引用書には語尾の人名の発音に訂正を加えてある。図は本文をそのまま写して朱書した如くであるが、本文誤訳を正しているところも少くない。

本文書入れは数百項目にわたり、欄外註には当時未訳の蘭書の説を採用しているばかりでなく、たとえば「和名抄」などの日本古典はおろか、中国の古典、字書を多数引用し、仏経まで参照している。

おしむらくはこの本、本館入庫の際の鈴木氏と直接関係があるか否か未調であるが、巻頭見返しに「田川」の署名あり、本紙第一張の右に「小田志村 中村本」とあるのがひとつのてがかりである。

それにしてもかほどまで「解体新書」にとりくんだ先哲に多大の敬意を払うとともに刊行後にこれほど研究が加えられたという一例を高く評価したい。

因みに、「解体新書」はそれほど多数刊行しなかったらしい。私見では「亀甲六角くずし紋カラ摺」の暗黄色表紙のものが初版初刷であり、無紋黄泥表紙は再刷、アズキ色または暗緑色表紙はさらにその後の増刷と考えられる。

（横浜市立大学助教）

享保十四年の蘭書和解

「西説伯樂必携」について

坂本 勇

江戸幕府は鎖国令下においても、しばしば和蘭商館に秀れた洋馬を注文して、馬匹改良また増産等を広く奨励していたが、このことは兵馬の権の維持と尚武振興のための政策と考えられる。

とくに八代將軍吉宗の時世には、三回にわたり將軍家御用馬が輸入され、享保十年（一七二五）七月には長崎出島にベルシヤ馬三頭、ジャワ馬二頭が到着した。このとき輸送責任者として来日したのが、馬医学、牧場の飼育管理法或いは乗馬術等を修めたハンス・ユージェン・ケイゼル Hans Jurgen Keijzel（一六九九—一七三五）である。幕府に差出した文書によればケイゼルを和蘭人と記載しているが、実はハンブルグ生れのドイツ人で教養豊かな二十六才の青年であった。従来例によれば輸送の重任を果した商館関係

者は間もなく帰国しているが、ケイゼルが馬学に関する知識の深いことを、商館長の Johannes Thedens が長崎奉行石河土佐守に報告したので、彼のテストが行われることになり、其の通弁を命ぜられたのが今村市兵衛英生（一六七—一七三六）である。

今村英生は世襲オランダ通詞の長崎今村家三代目で、一才の頃から父の市左衛門や出島の蘭人から和蘭語を口会で学び、元禄三年（一六九〇）二十才の折には長崎に来たケンペル Engelbert Kämpfer に逢い、また新井白石と親しく宝永六年（一七〇九）密入国の宣教師シドッチ Gio-vanni Bastista Sidotti と白石の対話が江戸で行われた時には、その通弁を務めている。さらに英生は通詞だけでなく本草学研究者としても知られ、のちに御用方兼通詞目附という此の役職の最高地位に就任した。

英生が長崎奉行とケイゼルの間に交わされた十五条の問答をはじめ通弁したのは享保十年九月で、我が国に西洋流馬学が伝来したことになるが、翻訳された文書は直ちに江戸に送られ評議の結果、ケイゼルは以後十年間滞在して

馬事發展に多大の貢獻を及ぼすことになった。英生五十五才の時である。

幕府当局の御尋書の形式で行われた質問は長崎奉行を通して和蘭商館に送付され、ケイゼルの答は誠実丁寧であり、英生の翻訳もまた適正であつたので、享保十二年を中心に其の和解上達は數回に及んでいる。さらに翌十三年からはケイゼルが持参した馬術、馬療書、本草（藥物）書等に関するオランダ本の翻訳にも着手することになった。

解体新書が原著ターヘル・アナトミアに載る解剖図譜から翻訳を開始したように、西説伯樂必携の場合は問答通弁から始まり、蘭書翻訳に進んでいる。

英生とケイゼルは享保十四年八月江戸に召出され、御浜御殿（現在の浜離宮庭園）に一室を賜り、翻訳事業の完成を急ぐことになったが、杉田玄白らの立場と違ひまことに恵まれた官命業務である。翌十五年三月には一応原稿がまとまり、先きの問答集と馬術、外科手術の実技の記録等も併せて、十六年（一七三二）に「蘭書和解西説伯樂必携」一名「阿蘭陀馬養書」五巻が刊行された。今村市兵衛英生が最

初の通弁に従事してから五年を要したことになり、彼はすでに六十才を迎えていた。

ターヘル・アナトミアがドイツで発行され、その蘭訳書を杉田玄白らが入手したように、本書についても其の原著の存在が求められているが未発見である。写本には当時の馬体解剖の名称、病名と治療法、藥物名等が記述されているが、とくに藥物は医学と共通しているので、医史学会例会で改めて発表の機会を得たく希っている。

西説伯樂必携が刊行された翌々年の享保十八年（一七三三）に玄白誕生、解体新書が刊行されたのは安永三年（一七七四）であるから、西説伯樂必携から四十三年後になり、大槻如電博士は「新撰洋学年表」のなかで「蘭書翻訳此書を最先とすべし」と記述されている。しかし此の蘭書和解は幕府役人である通詞が官命で翻訳。しかも一部の関係者だけが入手した限定版であつた。したがって解体新書翻訳に伴う諸々のエピソード、蘭学界また日本文化に与えた影響のようなものは本書からは引き出せない。そのなかで仙台藩の蘭方医家大槻玄澤が西説伯樂必携を机右に置き、藩

主の命で蘭書から馬の去勢術 *Kastration* に関する翻訳に従事した折の参考資料に供したこと、また將軍慶喜の侍医であった坪井信良が静岡に移った維新の頃、オランダ獣医牧畜書から翻訳して「獣医全書」と題する獣医学教科書を出版しているなど、西説伯楽必携の流れは蘭方医学と獣医学の混和した中で、明治の近代化までつづいていた。

(順天堂大学医学部)

小浜における杉田、中川家の新資料

田辺 賀啓・河原 朝夫

小畑昭八郎

杉田、中川家の小浜での遺跡、遺品について現在まで未探索で放置されていたものを、再調査をして明らかにし得たので報告する。

I 杉田家に関連したもの

1 甫仙の寄進したもの

大槻玄沢の杉田家三代略譜によれば、甫仙は質朴にて信心篤く、貧僧などに自身の衣などを与えたり、又「弁天一体若州羽賀寺に納め田地を附与、また石の不動明王一体同国宮川村滝の口に納む……」とある。

(1) 羽賀寺は靈龜二年(七一六)開山、元正天皇、村上天皇勅願の高野山真言宗派の寺で本堂は室町中期の建築、本尊は木造十一面觀世音菩薩立像にて何れも国指定の文化財となっている名寺である。同寺の丹生住職が土蔵の中で

小厨子の弁天一体を発見した。同寺には他に斯かる弁天像はなく、像自体は甫仙の頃のものと推定されるが、同寺の古文書では元禄と文化文政の間を欠除しており、又弁天像に記銘の見当たらない為に、明らかに断定しえないのが惜しまれる。

(2) 宮川村滝の口と云う所は、現在の地名にはないが、小浜市宮川大谷に曾洞禅宗竜泉寺の末寺である靈沢寺がある。同寺は元禄年間より記録があり、現在は無住寺である。本堂より溪谷をさかのぼった所に不動尊を安置した祠堂がある。この堂の上下に各一瀑あり、これを不動瀑又は不動の滝と云う。ここは精神病を癒すのに靈驗ありと伝えられ、今尚神札拝受に参詣する。数十年前迄その滝の下に精神病患者を梯子に臥床せしめて治癒を祈ったと云う。その滝の岩壁に小洞をうがって石の不動明王が安置されており、苔むした台石に右書きにて杉田氏と刻まれている。石像の状態と略譜記とから考察して先ず誤りなしと思う。

(3) 面山碑傍石について

面山瑞方和尚は曾洞宗派の学僧で多数の禅書を著述し、

小浜藩主酒井侯の菩提寺である空印寺の住職として招かれ、その後、著述と説法に専念する為に住職を辞し藩侯より小浜市松永上野に永福庵を建ててもらって住んだが、以後藩からの援助をうけず、代りに藩公認の托鉢許可をもらい精進して仏法の道をきわめた。その庵は明治初年に移転したが、この創建の旧跡に禅師を顕彰して面山碑が昭和初年に立てられた。この碑の傍に卵形の小碑が並立されてある。この小碑の表には、永福般若藏杉田甫仙助建……とあり、裏面に 宝暦三年 開闢 面山誌 とある。両碑の材質及び風化度は明らかに異なっている。即ち禅僧のために甫仙が助力したことは明白である。

2 玄白は在浜時代に長兄と義母を亡くしたが、空印寺の過去帳を調査せし処、元文六年二月十日 覚林了幻童子杉田甫仙子息 又、寛保三年六月二十七日 戒光為禪大姉杉田氏妻 を見出す。同時は昭和七年に国鉄小浜線の開通工事のために墓地の整理を行なったので両人の墓石は見当らない。

3 玄白の交友関係について

(1) 小浜藩儒者西依成齊の九〇歳の祝賀に玄白が贈った詩文の書がある。

(2) 国学者伴信友は山岸家より伴家の養子となった人であるが、当地に山岸日記なるものがあり、その中に玄白との交友模様を散見する。又、伴信友は同藩の玄白より養生七不可を教えられ撰生の道につとめた。小浜市立図書館には信友蔵書印のある形影夜話があり、同藩学者間の交流がうかがえる。

II 中川家に関連したもの

1 中川家は丹波国桑田郡馬路村より出ている。和田信二郎著「中川淳庵先生」によれば中川家菩提寺は東京の金剛寺で第五代妻以降は小浜の妙玄寺となっている。今回空印寺過去帳を調査して第一代仙安の父母の名を発見す。正徳五年十一月二十五日 中川仙安医士父 真如院栄室安居士と 享保十四年三月二十五日 中川仙安母 閑窓寿貞大姉とある。墓石は見当らず。依って小浜における中川家菩提寺は曾祖父父母が空印寺、子孫が妙玄寺となる。昭和十一年東京で中川淳庵先生百五十年記念によって顕彰と贈位申請

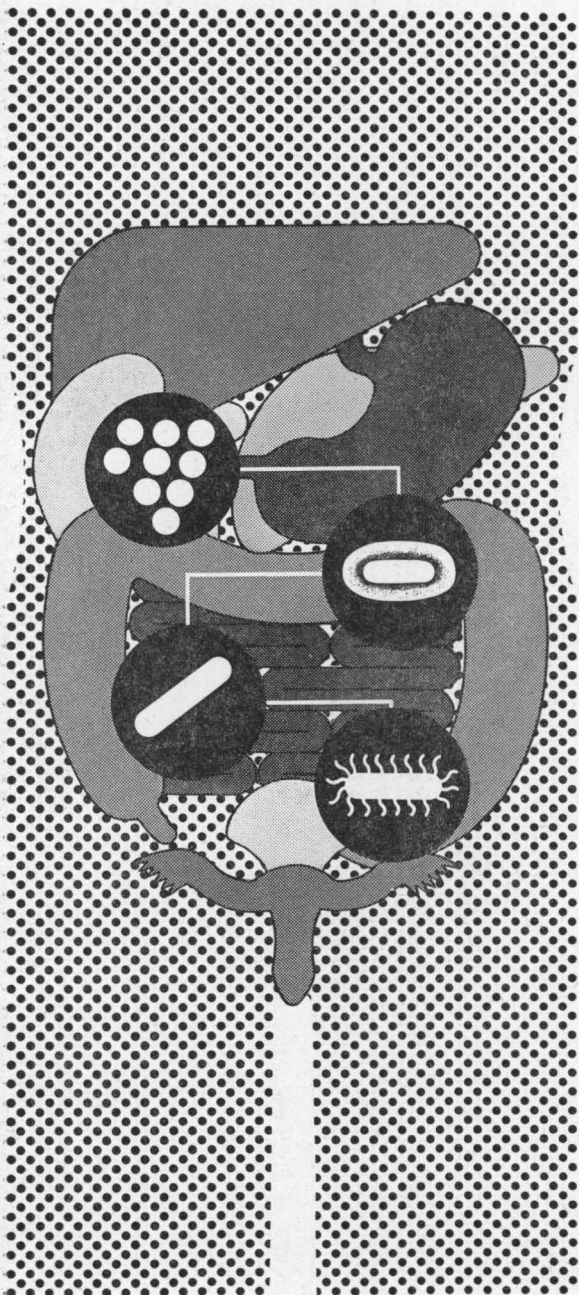
(贈従四位) 並に法要とがいとなまれ、地元小浜でも法要を行ったが、場所は此の空印寺であった。中川淳庵先生之碑は地面の關係で小浜公園に隣接した高成寺に昭和十二年に建てられた。

2 中川家は第七代仙安で絶えたが、その弟友治郎が竹田家の養子となり、竹田友治郎、万治郎、嘉一とつづき現在嘉一長男淳となり、淳氏は小浜市に住んでおられる。

III 解体新書に関連した人々について

出来れば小杉玄適、原松庵、岡新左衛門や、小石元俊の父祖である小浜藩家老の林野家についても言及したい。

尿路・腸管・胆道感染症に



PANACID

本剤は1970年、大日本製薬総合研究所で開発された抗菌性化学療法剤で、既知の抗生物質や合成化学療法剤とは異なる基本骨格、ピリドピリミジン環を有する。主としてグラム陰性菌に抗菌力を示すほか、グラム陽性菌のうち、ブドウ球菌にも作用する。

本剤は経口投与によりよく吸収され、抗菌活性物質が尿、胆汁および消化管内に高濃度に排泄されるので、尿路、胆道および腸管の細菌感染症に有効率が高い。

●適応症

ブドウ球菌およびグラム陰性桿菌（腸炎ピブリオ*、赤痢菌、大腸菌、クレブシエラ、プロテウス*）による下記感染症。尿路感染症*、腸管感染症、胆道感染症*、肺炎*（*印バナシッドカプセルのみ）

●用量・用法

通常、成人にはピロミド酸として1日1,500～3,000mgを3～4回に分けて経口投与する。小児にはピロミド酸として1日50mg/kgを3～4回に分けて経口投与する。

●包装

カプセル〔要指示〕100・500・1,000カプセル
シロップ〔要指示〕500ml

●薬価基準

1カプセル(250mg) 58.10円
シロップ1ml (5%) 11.20円

●使用上の注意

- 1.本剤は肝、腎障害のある場合は、慎重に投与すること。
- 2.本剤の投与により、ときに食欲不振、胃部不快感、嘔気、悪心、嘔吐、胃痛、膨満感、胸やけ、下痢等の胃腸症状、発疹、頭痛、頭暈、めまい、口渇等があらわれることがある。
- 3.本剤の投与により、過敏症状があらわれた場合には、投与を中止すること。

●新発売

バナシッドドライシロップ
包装〔要指示〕100g 500g
薬価基準 1g (20%) 44.80円



『遠西医範』と『医範提綱』(一)

大 鳥 蘭 三 郎

宇田川榛齋の著『医範提綱』が日本の解剖学史上重要なものであることはいうまでもないが、この書の成立についてはその題言の冒頭につきのように記されている。

題言

一 榛齋先生嚮^{サキ}ニ遠西名医著ス所ノ人身内景ノ書数部ヲ訳定シ、集メ成シテ全部三十卷トシ遠西医範ト名ク。其中ヨリ全身諸物ノ名及ビ官能^{ハツネ}の綱領^{オホヅケリ}ヲ述べ、別ニ一卷トシテ篇首ニ冠シ、医範提綱ト名ク。

また同書の最後のところに

医範提綱内象図銅版 箱入 出来

遠西医範 三十卷近刻

文化二乙丑年秋七月

と記してある。この二つの記載を併せ考えると、一は『遠西医範』のほうが『医範提綱』より先きに成ったもののように解され、一は『遠西医範』の版行が『医範提綱』のそれよりもおくれることを示唆するという、一見矛盾したようなこと

を記しているようにも思える。

これについて私はつぎのように考えた。一、宇田川榛齋は『医範提綱』の他にこれとくわめて近い関係にある『遠西医範』と題する書三十巻本を著わした。二、『遠西医範』は『医範提綱』が刊行されたのちに出版される予定であったところ、なんらかの理由からついにそのことが行われずに終わってしまった。

2

ところで、『遠西医範』の所在は長い間不明とされてきて、中には既に湮滅してしまったのではないかと言うものもあったほどである。私が偶然の機会から昭和十八年夏に東北大学図書館所蔵の狩野文庫本の中に、宇田川榛齋の自筆と覺しき『遠西医範』と題する二冊の草稿本を見出し、簡単にこれを紹介してから既に三十年余になる。

ところが不思議なものでこの三十年間に、『遠西医範』と題する写本が五種類出て来たので、まずそれ等について簡単に解説を加えることにする。便宜上これ等の写本をそれぞれの所在に随って五つの部類に分けることにする。

A部類は東北大学図書館所蔵の狩野文庫本で、表に『遠西医範』と題記されているものと表に「本編医範 肺篇」と記されているものとの二冊より成る。『遠西医範』と表記されているのはそのかたわらに膜、胸膜、胸腺と三行に記され、胸膜の下に肋膜、縦隔膜と書かれている。

B部類は東京大学所蔵の鸚軒文庫本で、表に「榛齋先生 医範原稿 口篇」と記されているものと「脳神經脊髓編」と書かれている二冊より成っている。

C部類は故鮫島近二氏旧蔵本で、内題に「遠西医範眼篇訳 図譜校訂」と記されている一冊本である。

D部類は天理図書館所蔵の「医範^{正纂} 滲胞編」と題記にある一冊本である。

E部類は国会図書館所蔵本で、題記に「錦窠翁遺書 六 遠西医範」とある一冊本である。

これら五部類七冊のものが現在まで知られている「遠西医範」と題する本の草稿である。一口に草稿とは言ってもそれ等のものは一様ではなく、多くのものは補訂、削除が行われた箇所がむしろ随所に存在し、いわゆる版下本と思われるものはただ一冊、C部類があるのみである。

Aの部類に属する東北大学図書館所蔵の狩野文庫本はおそらく宇田川榛齋自筆ではないかと思われる二冊の草稿本である。そのうちの二冊は題記に『遠西医範』とあり、その横に膜、胸膜、胸腺と三行に記され、胸膜の下に肋膜、縦隔膜と少しく小さく書かれている。

全部で十七葉より成り、はじめに膜の総論を挙げ、その構造、性質、作用等を説き、次で胸膜の項に移り、肋膜と縦隔膜とについての説明を行なっている。その所説は膜の総論中の順序と同じであるが、その終りの所では局所解剖的記載が多く見られる。

以上に続いて横隔膜と胸腺との記述が見られるが、右の諸項にあるような体裁に従って説明が行われている。

これ等の記述を総体的に見ていえることは、西洋解剖説を参照したものであることは明らかであっても、西洋のどの解剖書によったものであるかは一寸不明である。おそらくある一つだけの解剖書のみを参照したものではないように思われる。ブランカルツの解剖書がその内の一つをなしていることは、五葉目の記述にその名が見えているところから確かに言える。

A部類の他の一篇は題記に「本編医範 肺篇図ノ記校訂」と二行に別けて記してあるものである。すべてで七十九葉で、そのうち十二葉は「肺篇図記」となっている。従って「肺篇」の本篇の記載は相当に詳しい。

「肺篇」はさらに「気管篇」と「肺篇」とに分けてある。「気管篇」ではまず気管の主たる作用を挙げてから、その形

状、所在、構造を論じ、ついで気管頭（喉頭）、気管幹、気管支に分け、それぞれの所在、作用等を記述している。

喉頭の項では之を構成する五つの軟骨すなわち甲状軟骨、環状軟骨、二個の披裂軟骨、会厭軟骨を列挙し、各々の形状、所在、連結、性質を説き、それぞれに附属する緊帯、滲胞、筋肉、神経に言及し、主としてそれぞれの作用を説く。特に食物を呑み込む時、呼吸が行われる時、音声を発する時、くしゃみ、しゃっくりが起る時等の喉頭の作用を詳しく論じている。

喉頭部の記述に準じて気管幹、気管支の記述も詳しくなされているのに続いて、気管そのものの組織学的記述が行われている。すなわち五つの衣膜を挙げ、それぞれの性質、作用を説いている。

「肺篇」ではまずその作用を心臓の作用と比較して論じた後、その所在、性状、構造等の説明は前述した各項の記述と同じく、詳細を極めているが、ここではあえてふれない。

「肺範圍記」と表題に記されているものはその題記と並んで武蘭加兒都、巴兒歇応、格兒牟私と三行に記されている。これはブランカルツ、パルヘイン、クルムスと読め、Blankart, Palfyn, Kulmus の解剖書の附図を参照したことを指していると思われる。この篇の内題に当る所に「武蘭加兒都肺篇収載図」と記されているのはブランカルツの解剖書の附図より採ったことを明らかに示している。その欄外に「此図善シ載スベシ」とあって、「遠西医範」にも解剖附図があったことを教えている。

「肺篇図記」は肺篇の図譜のおのこの説明を試みているもので、A・B・C・D等の符号をつけて図の細部にわたる相当部分に解説を附し、読者の理解を一層容易ならしめるようにされている。今日これ等の図譜が残っていないのは残念である。

B部類は東京大学図書館所蔵本で、鶯軒文庫本、すなわち故土肥慶蔵博士の旧蔵本である。口篇と脳神経脊髓篇より成る。

口篇は題記に「榛齋先生 医範原稿 口篇」とあり、六十五葉を数える。はじめに「格児牟私、口篇第七」と記されていて、クルムスの解剖書“*Ontleedkundige tafelen*”の第七篇“*Van de Deelen des Monds*”の訳述を試みていることが分る。

ところで『解体新書』もまたクルムスの解剖書の「第七口篇」を翻訳しているので、『遠西医範』の訳文とこれとを併記してつぎに引用してみた。

『解体新書』では○唇口篇第七とあり、

○夫口者。面之大竅也。其肉媿シヤ。其属者。舌及機里爾睡管也」とある。『遠西医範』ではこれに対応するところは「口篇第七 一大較口ハ頭ノ深キ肉様ノ空間ナリ此中ニ舌、数多ノ腺、睡管アリ」と記されている。

これをクルムスの原書(蘭訳)にある“*SEVENDI TAFEL. Van de Deelan des Monds. 1. Bepaling, Os. de Mond, is die diepe vleezige holte des hoofds, in dewelke de tong, verscheide klieren, en speekselbuizen gevonden worden.*”とある章句と照らし合わせれば、この両者の訳文のどちらが原文の所説をより適切に言い現わしているかは、おのずから明らかである。

本篇はつぎにクルムスの舌篇の翻訳文を載せ、続いてパルヘインの解剖書の顔の前部、唇、頬篇、喉、顎、唇、耳等の腺の篇、舌骨篇やブランカルツの解剖書の舌とその属部篇、口、顎、唇、睡腺、睡管篇、齦盃顎、懸雍、喉舌骨篇の訳文を載せている。これ等の訳文は概して適切のように思えるが、パルヘイン、ブランカルツの原書を見ていないので確かなことはいえない。

なお筆録用紙の版心に風雲堂蔵書と刻されているが、これは宇田川榛斎の用紙というように考えられる。

「脳神経脊髄篇」と題記にあるものは総紙数百三十二葉より成る。はじめに「頭腔篇」と記し、これを表、裏の二部に分け、表に属する頭部、顔部の諸骨、薄皮、厚皮、滲胞（腺）、脂肪、毛髪及び諸筋はそれぞれ該当する諸篇で述べるとしている。それに続いて頭腔の裏に属する脳膜、脳髓、神経、靈液、脳血脈について、その所在、形状、構造、作用を細かに説く。その所説は西洋解剖説に拠るものであることは明らかであるが、どの解剖書に基ずいて成ったものであるかははっきりとはいえないが、ある一書の所説のみを引用したのではなく、二、三の解剖書の所論を参考した公算が大きいように考えられる。さらに脳髓の組織学的所見にも言及し、顕微鏡を用いて脳の淡黒髓、白髓を説く。その他長髓、輪状体、漏斗、粘滲胞、脳竇、肝胝体、透明中隔、穹隆、細条体、松子滲胞等の語を挙げて、それぞれについての説明を試みている。

特にこれに続く脳神経脊髄篇の終りの方の記述は解剖学的というよりは生理学的な説明に終始し、意識、記憶について説き、最後に脳神経疾患に触れている。いずれの場合にあっても靈液に説明の重点が置かれていることが目をひく。

5

C部類は故鮫島近二博士の旧蔵の草稿本で、全部で百十二葉から成る。内題に「遠西医範眼篇識函譜校訂」と記され、その下に宇田川玄真訳と明記してある。このような事例は他の『遠西医範』草稿本には全く見られないところであるともこのものがいわゆる版下本、またはそれに近いものであるといえるのではなからうかと考えられる。

眼を内外の二部に分け、外部の諸骨を先ず挙げ、続いて眼瞼を説き、上瞼、下瞼及びそれ等の附属器官を局所解剖的に述べ、それぞれの終りに各々の疾患を挙げ、治療法を簡単に記している。眼筋を直筋四、斜筋二とし、直筋を分けて挙筋、下牽筋、指揮筋、転移筋、斜筋を分けて斜上筋、斜下筋とし、各々について細かな説明を加えている。

眼の内部の構造を説くところではこれを膜、液、諸脈管の三者に分け、膜をさらに外皮膚、結膜、睫膜、角膜、葡萄膜、網膜の六者に分け、各々について細かな説明を試みている。

液を水様液、水晶液、硝子様液とに分けて述べているが、そのうちで顕微鏡を用いての研究方法が記してあるのは注目すべきである。但しその説明は理解に苦しむ所が少なくないように考えられる。

視覚の理論を説くところでは、眼と関係ある神経として脳神経の第二対、すなわち視神経、脳神経の第三、第四、第五、第六の各対神経を列挙し、視覚に与るものはこれ等のうちの視神経のみで、他はすべて眼の運動、知覚に関係あるものとしている。なおこの説明個所の欄外に『医範提綱』中の相当個所の所説が記されているのは注意を要する。

ついで眼液の由来に関する諸説を紹介してから視覚の説明を試みている。近視、遠視の理論をも述べているが、それ等は概して簡単である。カタラクタ・グラウコーマに言及し、それぞれの治療法を簡単に記している。

最後に眼篇にのせた図譜の説明を行ない、クルムス、ブランカルツの解剖書中の図譜を引用したことが判明する。各図に符号をつけて説明している。

6

D部類は天理図書館所蔵本で、見返しのところ「正集 医範 滲胞編」と記されているもので全部で十八葉から成る。全編漢文で記され、その定義から構造、形態、性状、作用を説き、終りに身体各所の滲胞の名称五十四を列挙している。

これ等の諸説を概括すれば滲胞というのは現在腺といわれているものに相当するものであることが分かる。なお最終頁に「文化十癸酉十一月念二日 校一了 養庵」と記されているのは本書の成立を知る上に重要な示唆をなすものと考えられる。

E部類は国会図書館所蔵本で、題簽に「錦窠遺書 六 遠西医範」と記され、伊藤圭介の旧蔵書である。総紙数八十二枚。見開きのところに、「中腔 遠西医範」と記されている。

その内容は、中腔、すなわち胸腔の局処解剖を述べたもので、全文ほとんど漢文で記されている。胸腔に属する諸器官のうち、気管、肺、胃についての説明はそれぞれの該当箇所で見られ、ここでは心臓、動脈、静脈に関する説明が、くわしく行われているが、その論旨は必ずしも明快ではない。血管の組織学的研究方法についても言及し、顕微鏡を用いての研究結果もまた述べられている。さらにまた胎児の血行に就ての説明も行われているのも見逃せない。

On the "Enaei-ihan" and "Ihan-teiko" (Two Anatomical
books written by Shinsai Udagawa) Part 1

by Ranzaburo OTORI

S. Udagawa (1776-1843) was a famous Japanese physician. He wrote many books about Western medicine, including the two anatomical books mentioned in the title. One of them, "Ensei-ihan" consisting of 30 volumes, was not published and only 7 of the volumes concerning the lungs, the pleura, the glands, the vascular system of the breast, the eye and the central nervous system, now remain in 5 separate libraries.

Udagawa wrote them referring to S. Blankaart's, J. P. Palfyn's and A. Kulmus' anatomical books. The latter was the source of the Kaitaishinsho, the first anatomical book translated from Dutch into Japanese. It was determined that Udagawa could more fully understand Western medicine than his predecessors.

"Ihan-teiko" was published in 1805. and was very popular at that time because it used simple language and consisted of 3 volumes,

越後の蘭方医森田兄弟について (一)

長谷川 一夫

- 一、はじめに
- 二、蘭方医学の修得
- 三、診療をめぐる
- 四、その他の功業
- 五、おわりに

一、はじめに

越後の蘭方医森田千庵・円治の兄弟に関して、円治の傍系に当る森田芳夫氏(新潟県
榎尾市)所蔵の、千庵から円治に宛てた書翰はじめ数多くの資料閲覧の機会を得た。

小稿は、これらの資料を得て、森田兄弟の蘭方修得、診療のようす、あるいは、地域社会への働きかけなどについて述べてみたいと思う。

森田千庵、円治の兄弟は甫三、のぶ夫妻の二、三男として、越後国蒲原郡加茂町(現在の新潟
県加茂市)に生まれた。

父甫三は十八歳のとき出府。幕府本丸奥医師岡甫庵と岡寿庵に六年間、医学を学ぶ。本草・病理・薬利等の研鑽に努めた。

千庵（仙庵・僊庵とも記す）の生年は、寛政十（一七九八）年十月二十二日。幼名を太仲。名を徳盛、後に守古と改む。字を謙斎・巢守園・榎々舎、雲樵などと号す。千庵は通称にして、晩年には逸（悦）庵とも称した。

『森田家系図』¹には、文政三（一八二〇）年父甫三と親交のある京都の蘭方医藤林普山の来越を機会に、千庵は親交を深めるだけでなく、上洛の勧誘もうけた。翌四年上洛、直ちに藤林塾に入門し、蘭語の訳読修業に励み、医書バタビア局方の翻訳を手懸る。在籍一年余、文政五（一八二二）年八月二十八日帰国の途についた。

しかし、千庵の蘭方医学修得に対する熱意は、彼をして翌六年江戸宇田川塾に入門せしめている。一たん帰国したが再度出府し、宇田川裕庵・吉雄忠次郎・藤井芳亭らに蘭語の訳読を学んだのである。文政十一（一八二八）年早春、帰国して家督を継ぎ、医業に専念している。

この間、僅かではあるが、長崎に赴き、シーボルトにも師事したと伝えられている。

その後、天保二（一八三一）年江戸に出て新しい情報を吸収すべく努めたこともあった。

没年は安政四（一八五七）年十二月二十二日、年六十歳である。

次に、弟の円治は文化七（一八一〇）年八月十二日に生まれ、名は善盛、通称を円治といい、天保十四（一八四三）年越後国古志郡栃尾町（現在の新潟県
粟穂尾市）に移転して医業を開いた。これ以前の円治に関することは詳かではない。ただ、円治の文政六年と記された署名入りの医書の写本が遺されていることから、加茂町にあって父の業を手伝いながら医学の修業に励んでいたものと推察される。

安政四年蒲原郡月潟村（現在の新潟県西
蒲原郡月潟村）に移転、この頃から酒造業を企画していたらしく、同六（一八五九）年月潟村の金兵衛の口入れにより、同郡西萱場村（現在の西蒲原
郡西萱場村）の田辺所左衛門所有の酒造蔵、米搗蔵その他を購入、そこに移転する。

しかし、本居は栃尾町であつたらしく、西萱場村居住当時の記録には「仮住」と記している。酒造業経営は失敗に終つたと伝えられている。

明治三（一八七〇）年再び栃尾町に戻り、医業に専念する。

没年は明治十一（一八七八）年七月一日、年六十七歳である。

本稿においては、森田兄弟の蘭方医学の修得の状況を、遺された書籍・写本類をはじめ書翰類から窺い知るとともに、交友関係を追及し、併せて実際の医療活動についても観察してみたいと思う。

二、蘭方医学の修得

蘭方医学修得以前の千庵の医学知識について、『森田家系図』には、

若年ノ中ハ漢ノ古医方ニ入テ傷寒論誦、又眼科尾州之馬嶋流ヲ習ヒ、接骨術、外治療ヲ学フ

とあり、後漢の張仲景の傷寒論を宗とする実証主義的医学の古医方、大僧都清眼を祖とする馬嶋流の漢方眼科などを学んだことが分る。父甫三が古医方を学んでいたから、千庵もこの父の影響を受けていたと考えられる。また、父甫三は親交の深い京都の蘭方医藤林普山に患者の症状を書き送り、治療の指示を仰ぐなど、晩年には積極的に蘭方医学を吸収し、診療に生かそうとする態度が見受けられる。このことからして、父子ともども蘭方医学の吸収に励んでいたものようである。千庵の藤林塾入門は、まさに、その具体化といえよう。

文政三（一八二〇）年五月六日付の藤林普山から森田甫三宛の尺牘には、「御令息最速出府候哉如何承度奉_レ存候、未出府も無_二御座_一候はば乍_レ憚宜敷頼上候」とある。また、同年九月十一日付の普山から千庵と古川越竜宛の尺牘には、

一筆啓上仕候、時分猶冷氣弥増之節に御座候処愈々御安全に被_レ成_二御勤学_一ニ珍重至存候、随而拙老道中無事にて当月四日に帰宅仕候間、乍_レ憚御心易思召可_レ被_レ下候、誠に逗留中は日夜御苦勞に相成不浅辱奉_レ存候、扱々当地も殊之外蘭学盛に相成申候、何卒御地も御力を以て盛になり候様祈上候、将出立之節は種々預_二餞別_一ニ恭存候、何卒来春は早々御出京被_レ成候様奉_レ待上_二候、先は右御礼方々草々如_レ此に御座候、謹言

九月十一日

藤林泰介

森田僊庵様

古川越竜様

二白追々冷気と相成候間乍憚御自愛祈上候、草々頓首

尚々大橋石田、帰山何れへもよろしく御伝被下様願上候、頓首

千庵の上洛についてはかなり以前から話があったらしく、普山にその督促をうける程、期待されていたことが窺われる。普山の来越が上洛を一層推進させたようで、翌文政四（一八二一）年の早春、千庵は加茂を出立、同年四月八日京都に着き、早速藤林塾に入門している。

なお、藤林普山の来越年度については、従来不明であった。ところが、『森田家系図』には、以下のように記載されている。

文政三辰年京師ヨリ藤林泰助越後ニ遊歴ス

これと前記二通の尺牘から、文政三年五月六日には在京していることが分り、同年九月四日には越後遊歴の旅から帰着したことが分る。それ故、普山の来越は、文政三年五月六日以降、九月四日までの短期間であったことが判明する。

そこで、藤林塾々生当時の千庵の研鑽の様子を探ってみたい。

まず、蘭方医学に基いた処方研究の一端を窺い得るものとして、「北越 賀茂 僊庵森田徳筆記」と明記された『玉川堂丸散方函』⁽⁴⁾が残されている。

今、ここに、その目次のみをあげると、

玉川堂丸散方函

目次

○マルチス丸 ○ヒトリヲルマルチス丸今日方ニ有
塩劑編 ○セエプ丸石丸 ○カケシヤ丸 △スパアンセフリイグ丸 ○磨
石散 ○阿片丸 △真珠散 △底野亜迦 ○カロメル丸 ○アカリコス丸 ○神功石 ○ゴウラルドワートル △発
泡膏今日方 △ノリンベルゲ膏今日方 △バシリコン膏今日方 ○黄膏 ○青膏 ○モスタルド酒 ○健胃丸 ○アンテス
パスモジカ

の二十一種の医薬品名がみえる。

千庵がこの稿本に「玉川堂」と名づけたのは、おそらく恩師普山著『西医方選』(文政十一年新鑄)の表紙にみえる「玉川堂蔵版」のそれを引用したものとと思われる。内容的には右の目次を督見してもわかる通り師普山の訳著『西医今日方』をはじめ、藤林塾生として、普山に受けた教へと、自らの研究等を盛込んでまとめたものであり、普山の学を継承するこの表明でもあったと察せられる。

次に、旅中の小使い帳ともいうべき覚書には、購入した医書『和蘭薬鏡』『玉篇』『語法解』『訳鍵』『五液診法外科則』が、また、購入予定のものに、『内科撰要』『ハルマ』『三部の内科』『海上の八譜』があげられている。⁽⁵⁾

千庵の勉学の成果としては『バタバア局方』の翻訳を手がけたことがあげられる。それに『普山先生和蘭十六方』文政癸未(一八二五)

一冊自筆写本、普山訳『秦西度量考』一冊九丁自筆写本、『挙家纂要訳稿』文政五(一八二四)一冊十四丁自筆写本、『船品写真図譜』文政癸未(一八二五)九月二日(六年一八二三)一冊三二葉自筆写本などが残されており、その活動の様子を知ることができる。

また、京都遊学当時、親交のあった人たちを彼が書き留めた二種の『人名録』と『千庵随筆』によって挙げると、医家

藤林先生・医家小森元良・医家宇野義兵衛・小寺沢鱗介・医家勝田玄恪字季風豊後日出・宮崎典膳・宮崎将監・医師伊藤舜民^主・

佐藤九八郎名千秋歌人・白嶺屋勇藏・鳩居堂香具屋久左衛門・医師山崎玄東・医師伊丹直江・吉田屋治兵衛書肆・美濃屋磨子細・長松随友

長州萩藩医・西尾含章・山田玄策・水野源之進・魔島助太郎・中島随軒・藤田佐五郎・井上九阜・仲伊三郎・松本寛吾・田中尚

謙・天羽源藏・田中利逸・田中三鼎・新宮凉庭・飯沼良吉・綴喜慶太郎・安達健司・熊倉平之進・伊勢や利衛・林東馬・

松波雅楽頭・隱岐播磨守・藤木備後介・梅辻典膳飛騨守・小出多門御使番・浜崎右門御使番・内藤長蔵・丸山柳沢藤林塾生・吉田冬蔵藤林塾生
・田中仁菴藤林塾生・近江屋八千物屋也・吉田屋久兵衛米屋・若山屋茂七・大口広海・長沢伴雄など多数である。⁽⁷⁾

千庵の京都遊学は、文政四年四月から、翌五年八月二十八日帰途につくまでの一年余の間であった。

次に、『森田家系図』には、

廿六歳之時東都出テ歌川容庵(宇田川)・天問台吉尾忠次郎、加州侯之藩藤井等三人ニ就テ蘭書三四部訳シ帰郷ス、尤兩度東都出府ス、

と、千庵の江戸遊学を伝えている。

文政六(一八二三)年十二月三日付千庵より甫三宛尺牘、

(前略)

一 癩癧之義ハ何れ末タ不_レ経_二年月_一者ハ、水銀膏又は其にテレメンターナの油ヲ加へ外用可_レ然奉_レ存候、内服之薬劑ハ血液を清浄にすることの則チ刺古石消石緩汞等のことの佳ならん、猶ヘイステルの外科書訳出来次第写取備_二御尊覽ニ可_レ申奉_レ存候間、其書ニ付テ篤与御檢査被_二下置_一度奉_二願上_一候、

一 脹満之義ハ、拙者治療仕候与李別段之義も無_二御座_一候、矢張腹水ハ針を刺水を取る事、氣張ハ内服ニ而馬風劑可_レ然奉_レ存候、乍_レ併其起源を篤与御見究被_レ遊被_二下其症に随而施劑可_レ然奉_レ存候、

一 痘瘡區別之義は、先日申上候熱病之區別とハ別なる事無_レ之筈ニ御座候、猶熱病論中之看法一番委_二御座候間、是ニ就_二御檢査被_レ遊被_二下度候、

一 癩癧之病人は、眼中に其閉塞の癖付候事故先ツ六ヶ敷との事に奉_レ存候、外真の労瘵、中風・癩病是三病は何れ聞合候とも同じ様ニ奉_レ存候(癩病の事也)只血液のシケウルボイリを兼る事の様ニ奉_レ存候(後略)

江戸宇田川塾に入門した千庵は、積極的に蘭方医学の研鑽を重ね、その成果を郷里の父に書き送っている。『泰西熱病

論』を引用して私見を述べたり、ヘイステルの外科書にも話が及んでいることが窺われる。

さらに、翌文政七（一八二四）年二月二十六日付の千庵より甫三宛の尺牘には、「藤井芳亭君、渋谷両家にて月に十八日之会日に下読も有之候間」と、千庵は藤井芳亭・渋谷淡斎らと毎月十八日に会合を持ち、蘭文訳読に励んでいる様子を伝えて⁽¹⁰⁾いる。

前後二回にわたる江戸遊学で、千庵はオランダ語辞書 *Woordenboek Vertalen en Verzamelen door Wigenzin te Jedo*（付韻鏡檢）一冊と、『加毘湿多図譜』（*Kabinet der natuurlyke Historien Wetenschappen, 1722.*）一冊自筆写本（四十二葉添）と、『船品写真図譜』一冊自筆写本・着色図三十二葉の三点がある。⁽¹¹⁾

なお、栃尾市の森田家には、千庵自筆写本『*Nederduitsche Taalen*（西語名寄）』七十二丁阿蘭陀通詞・蘭学者の作成・常用した蘭日単語帳一冊が遺されている。⁽¹²⁾

この両度の遊学の後、千庵は加茂に戻り、家業を継ぎ、開業している。その後、戸塚静海の記録は、天保二（一八三一）年千庵が江戸に滞在していることを伝えて⁽¹³⁾いる。それは中央の新しい医学関係の情報を吸収せんとするためのことであつたと察せられる。

そこで、京都遊学の時と同様、江戸遊学当時の千庵と親交あつた人をあげると、医師岡道深様・医師山田立長様・医師

吉田意安様・小俣治郎八様・医師塩田脩三様・医師宇田川玄真先生・医師蘭学者宇田川榕庵先生・渋谷淡斎^{小川町簡井和泉・機御内男平治郎}

医師渋谷川道達^{小川町御原遠江守・機御内男平治郎}・渋井左兵衛^{小川町戸田長}・吉田長叔^{かやはやくしの前南へ行左}・井田定七、医師藤井芳亭先

生^{巢鴨加賀様・御中屋鋪}・医師戸塚亮齋^{芝三十軒堀、男静海、遠州掛川ノ}・医師坪井信道^{美濃大垣人}・医師小邸椀齋^{北越長岡人、当時日本橋桶丁二}・山田文吉^{宇田川塾生シイヘルト先生長崎}

^{塾井}・医師伊藤大鳳・医師大道中亭・兼杉道順・同蘭溪、原田九十九・伊藤良眼・工藤伯淳^{北越長岡人、当時日本橋桶丁二}・山田正仙・茂野帯刀・平井

俊三・河野越竜、佐藤玄珉・林主税・四方田喜十郎・岡田真澄^{下谷土町御徒士町通り加藤様御}・中屋治兵衛、卓郎^{西園薬師}・川本幸民・青津篤左衛門・片

桐道林^{村松、河野}・室将監・斎藤泰蔵・佐藤甚助^{星敷之浦}・中山新吾^{北海、下谷土町御徒士町通り加藤様御}・井上久次郎などの多きを数える。⁽¹⁴⁾

一資料から見た科学者シーボルト

矢部一郎

一 緒 言

バタビヤ文書館にはヨーロッパからバタビヤ經由で日本の出島に送られた書籍について一八二六（文政九）年十二月二日付でシーボルトが作った到着控の文書がある。この文書の原文は既に板沢によって報告され、さらにその和訳が紹介された。⁽³⁾ また、最近上野は板沢の原文を紹介し、その一部について解説している。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

この文書の中の書籍は直接にはシーボルトの研究に資したものであるが、間接的にはシーボルトの日本人の門人や友人に影響を与えたとも推測される。⁽¹⁾⁽⁵⁾ それ故、この文書中にある書籍及び著者をはっきりさせる事はシーボルトの知識や関心とそれ等の日本人への影響を知る事となる。

しかし、板沢の報告にある資料では、著者名はフルネームでなく、表記が蘭語化しているものもあり、書名は短略化・誤字・蘭英独仏羅の混用が見られ、かつ刊行年を欠くものも多く、確認を阻んでいる。また、板沢によるその「和訳」も自然科学に専門外のためか誤訳が多く見られる。そこで、論者はこの報告資料と「和訳」について、訂正も含め調査検討した。しかし、不明のものや疑問を残したのも少なくない。後日の調査を期したい。

二 板沢の報告資料と和訳

板沢の報告によるバタビヤ文書館にある当文書 (Japan 22, Bylage No. 5) は次の如くである⁽⁶⁾

Nota einiger boeken uit Europa & Batavia in 1825 ontboden, en in dit Jaar alhier ontvangen

一八一五年ヨーロッパ及びバタビヤより船載、同年中当地着の書籍控 (右の数字は価格) (表一)

(1) Goertner. De Siminibus et fructibus plantarum 4 deelen. f. 104. —	(18) Kastnerss. Grundris der Experimental Physik. 2 Bde.
(2) Sprengels. Anleitung zur Kenntniss der Gewächse. 3 deelen. 29. —	(19) Hermstaedt. Experimental chemic. 3 deelen.
(3) Linne. Systhema vegetabilium. 7 deelen. 76. —	(20) Johns. Chemisches Laboratorium, oder Analyse der Naturalien.
(4) De Candolle. Systhema vegetabilium. 2 deelen. 25. —	(21) Blumenbach. Handbuch der vergleichenden Anatomie.
(5) Cuvier. Regne animal. 4 volum. 50. —	(22) Jlliger. Prodomus systematis mammalium et avium.
(6) Nees van Esenbeck. Leesboek der botanik. 2deelen. 20. —	(23) Rudelphi. Entzoovum Histoire.
(7) Vier Jahrgange der Flora. 8 deelen. voor het inbinden van 2 derzelven ter Landsdrukkerij. 36. —	(24) Hoffmans. Handbuch der Mineralogie. 1817.
(8) Cranfort. History of the Indian archiperago. 300 lium. 17. —	(25) Breithaupt. Über die Achtheit der Kristalle.
(9) Ramdohr. Die Verdaungswerkzeuge der Insekten met 30 Kupfern. } 264. 16	(26) Cuvier. Leçons d'Anatomie Compareé.
(10) Meekols, System der vergleichenden Anatomie, 1 deel	(27) Tiedemans. Zoologie. Heidelberg 1810—14.
(11) Humbold u. Bauplant. Beobachtungen aus der Zoologie. 3 deelen.	(28) De la Cepede. Histoire naturelle des poissons.
(12) Oken. Lehrbuch der Naturgeschichte. Leipz. 1816.	(29) Humbold. Essai politique sur le royaume de la nouvelle Espagne. 5 vols.
(13) Lamark. System des animalse saat vertebres.	(30) Humbold. Voyage aux regions equinoxiales. 8 vols.
(14) De la Cepede. Histoire naturelle des quadrupedes, vipares et des serpens ins deutsche mit Anmerkungen und Zusatzen von J. H. Bechstein. Weimar 1800.	(31) Sprengel. Grundzug der wissenschaftlichen Pflanzenkunde. in 8.
(15) Meeren. Naturgeschichte der Amphibien.	(32) Ballenstedts. Die Urwelt. 3 Thl. in 8.
(16) La Perouse. Reizen rondom den Wereld. 3 deelen.	(33) Werners. Letztes Mineralsystem in 8.
(17) von Swinden. Verhandeling over de Lengte op Zee.	(34) Persoon. Synopsis methodica fungorum.
	(35) Parrot. Grundriss der theoretische Physik.
	(36) Oken. Lehrbuch der Zoologie.
	(37) Jussieu. Darstellung des Pflanzensystems.
	(38) De Candolle. Prodomus systematis regni vegetabilis,

577. —

- (39) Blumenbach. Abbildungen naturhistorischer Gegenstände.
 (40) Nees van Esenbeck. Das system der Pilse und Schwämme.

1250.16

Dezima den 2^{en} December 1826

Dr. von Siebold.

と云ふので、その後板訳は『人物叢書シーボルト』で前記資料の「和訳」を紹介している⁽⁵⁾。(表一)⁽⁴⁾。

- | | |
|----------------------------------------------------|------------------------------------|
| [1] Gaertner 植物書 4冊 104 グルデン | [21] Blumenbachs 人類の多様性 |
| [2] Sprengels 作物案内 3冊 29 グルデン | [22] Illiger 男女前駆症状論 |
| [3] Linne 植物分類 7冊 76 グルデン | [23] Rudelphi 動物学 |
| [4] de Candolle 食用植物 2冊 25 グルデン | [24] Hoffmans 鉱物便覧 1817年 |
| [5] Cuvier 動物書 4冊 50 グルデン | [25] Breithaupt 結晶の八角形について |
| [6] Nees van Esenbeck 植物教科書 2冊 20 グルデン | [26] Cuvier 比較解剖学 |
| [7] Vier Jahrgänge der Flora
植物学の四ヶ年 8冊 36 グルデン | [27] Tiedemans ハイデルベルヒ動物学 1810—14年 |
| [8] Cranfort 東印度史 17 グルデン | [28] De la Cepede ベルシヤ博物誌 |
| [9] Ramdohr 昆虫観察記 | [29] Humboldt メキシコ政治論 |
| [10] Meekols 比較解剖学 | [30] Voijage 旅行記 8巻 |
| [11] Humboldt 動物の観察 | [31] Sprengels 植物誌 8巻 |
| [12] Oken 博物学教科書 | [32] Ballenstedts 世界 8巻ノ内第3 |
| [13] De la Cepedele 博物学 | [33] Werners 最新鉱物学 8巻 |
| [14] Merrem 両棲類動物誌 | [34] Persoon 系統的博物誌 |
| [15] La Perouse 世界一周記 3冊 | [35] Parrot 理論物理学の基礎 |
| [16] Van Swinden 海洋広域論
以上8部 673 グルデン 16 スタイヘル | [36] Okens 動物学教科書 |
| [17] Kastners 物理学実験の基礎 | [37] Jussien 植物図説 |
| [18] Hermstaeat 化学実験 | [38] Prodrsmus 系統的博物誌 |
| [19] Johns 化学事驗室 | [39] Blumenbach 博物写生図 |
| [20] Blumenbachs 比較解剖学便覧 | [40] Van de Cordellsers アメリカの住民 |
| | [41] Nees van Esenbeck 菌類及海綿類の分類 |

以上二二五〇グルテン一六スタイヘル 出島 一八二五年十二月二日 ドクター、フォン、シーボルト

板訳の「和訳」には一見しても、ミスプリントや誤訳が多く、かなり大きな訳も見られ、順序も報告資料と一致していないので、比較しにくい。比較照合の結果、報告資料の(13)が「和訳」に欠けており、「和訳」の(21)と(40)が報告資料

に見当らないことがわかった。この事についての追及は直接原資料に当らねばならず、後日の検討に期待する。また、「和訳」に目付が一八二五年十二月二日とあるが、一八二六年の誤りである⁽⁸⁾。

三 書名と著者について

さて、この報告資料と「和訳」についての論者による訂正を含めての調査検討を紹介したい⁽⁹⁾。まず著者名とその経歴、次に正確と思われる書名とその翻訳を示した⁽¹⁰⁾(表三)。

- (1)[1] Gärtner, Joseph (1732~1791) ドイツの植物学者。植物学者 Koelreuter, Joseph Gottlieb の友人。植物学者 Gärtner, Karl Friedrich の父。
『種子と果実のなる植物』
- (2)[2] Sprengel, Kurt Polykarp(1766~1833) ドイツの生物学者。Halle 大学教授。生物学者 Sprengel, Christian Konrad の甥。
『植物知識入門』
- (3)[3] Linne, Carl von (1707~1778) スウェーデンの博物学者。リンネの雌雄蕊分類法と二名法で有名。
『植物の体系』
- (4)[4] Candolle, Augustin Pyrame de (1778~1841) スイスの植物学者。自然分類を提唱。
『植物の体系』
- (5)[5] Cuvier, Georges Léopold Christien Frédéric Dagobert (1769~1832) フランスの動物学者。比較解剖学、古生物学、動物分類学の研究。天変地異説の提唱。
Règne animal distribué d'après son organisation, 1817
『体制によって分類された動物界』
- (6)[6] Nees von Esenbeck, Chistian Gottfried (1766~1858) ドイツの植物学者。自然哲学者。熱帯植物誌及び下等植物の研究。
Handuch der Botanik, Nürnberg, 1820
- (7)[7] 著者不明
『四年間の植物相—政府印刷所製本』
- (8)[8] 著者不明 (Cranfort)
『東印度諸島史』
- (9)[9] 著者不明 (Ramdohr)
『昆虫の消化器』

- (10)[10] Meckel, Johann Friedrich (1781~1833) ドイツの解剖学者。比較解剖学の研究。
『比較解剖学体系』7巻 1821~1833
- (11)[11] Humboldt, Alexander von (1769~1859) ドイツの自然学者。植物地理学者。
Baupland, Aimé Jacques Alexandere, フランスの植物学者。フンボルトの共同研究者。
『動物学上の観察』
- (12)[12] Oken, Lorenz (1779~1851) ドイツの自然哲学者。生物学者。
- (13) Lamarck, Jean Baptiste (1744~1829) フランスの博物学者。進化論者。動植物の分類学の研究。
Système des animaux sans vertèbres, 1801
『無脊椎動物の体系』
- (14)[13] Lacépède, Bernard Germain Etienne de Laville (1756~1825) フランスの博物学者。魚類の研究。
『J. H. Bechstein による註解及び補遺のついたドイツの蛇類及び四足類の博物誌』
- (15)[14] 著者不明 (Meeren)
『両生類の博物誌』
- (16)[15] La Pérouse, Jean Francois, Comte de Galaup (1741~1788) フランスの科学者。博物学者。探検家。
- (17)[16] Lassen over het planetarium, tellurium en lunarium, Amsterdam, 1803 の著者 Swinden, J. H. van と思われる。
- (18)[17] Kastner, Karl Wilhelm Gottlob (1783~1857) ドイツの物理及び化学者。リービッヒの先生。
『実験物理学入門』
- (19)[18] Hermbstädt, Sigismund Friedrich (1758~1833) ドイツの化学者。薬学者。
『実験化学』
- (20)[19] John, Johann Friedrich (1782~1847) ドイツの化学者。
Chemisches Laboratorium, oder Anweisung zur chemischen Analyse der Naturalien, 1808
『化学実験室及び天然物の化学分析のための案内』
- (21)[20] Blumenbach, Johann Friedrich (1752~1840) ドイツの生理学者。人類学者。
- (22)[22] 著者不明 (Jlliger)
『哺乳類鳥類分類序説』
- (23)[23] Rudolphi, Carl Asmund (1771~1832) スウェーデン生まれ。ベルリン大学教授。動物学者。医学者。
Entozoorum sive vermium intestinalium historia naturalis, 2 vol., 1808~1810
『小腸寄生虫の博物誌』
- (24)[24] 著者不明 (Hoffmans)
- (25)[25] Breithaupt, J. F. A. (1791~1873) イギリスの鉱物学者。彼の名にちなんで安ニッケル鉱を breithauptit という。
- (26)[26] 前出 (5) (Cuvier)
『比較解剖学講義』1801~1805年
- (27)[27] Tiedemann, Friedrich (1781~1861) ドイツの動物学者。解剖学者。
『動物学』

- (28)[28] 前出 (14) (Lacépède)
『魚類の博物誌』6巻, 1798~1803年
- (29)[29] 前出 (11) (Humboldt)
『新スペイン国王に関する政治論』
- (30)[30] 前出 (11)(29)
Voyage aux régions equinoxiales du nouveau continent, 30巻 1811~1826
『新大陸赤道地帯旅行記』
- (31)[31] 前出 (2) (Sprengel)
『科学的植物学綱要』
- (32)[32] Ballenstedt, ドイツの牧師
『太古世界』
- (33)[33] Werner, Abraham Gottlob (1750~1817) ドイツの鉱物学者。フンボルトの先生。
『最新鉱物分類学』
- (34)[34] Person, Christian Hendrik (1755~1839) ドイツの植物学者。
Synopsis Fungorum, 1801 であろうか?
『キノコ学概説』
- (35)[35] 著者不明 (Parrot)
- (37)[37] Jussieu, Antoine Laurent de (1748~1836) フランスの植物分類学者。自然分類を提唱。
『植物分類図説』
- (38)[38] 前出 (4) (Candolle)
『植物自然分類序説』
- (39)[39] 前出 (21) (Blumenbach)
『博物学の対象の写生』
- (40)[41] 前出 (6) (Nees von Esenbeck)
System der Pilze und Schwämme, 1817
『菌類の分類』

目 次

この書の著者として、(生物学者) Linne, Jussieu, De Candolle, Person, Lamarck, Cuvier, Humboldt, Oken, Blumenbach, Meckel, Tiedemann, Gärtner, Nees von Esenbeck, Rudolphi, Sprengel, Baupland, Lacépède,

La Pérouse, (化学者) Hermsbriidt, John, Kastner, (鉱物学者) Breithaupt, (牧師) Ballenstedt について生歿年や経歴などがわかったが、Hoffmann, Randohr, Meeren, Cranfort, von Swinden, Parrot, Van de Cordellser については後日の調査に期する外ない。

題名だけでは正確な事は言えないが、これらの書籍を分野別に分類して見ると、生物学27部、物理学2部、化学2部、人類学1部、鉱物学3部、地理学その他(生物地理も含む)7部である。⁽¹¹⁾

板沢の報告資料と「和訳」での書籍数は一致せず、「和訳」では43部としているが、両者の照合によっても42部しか挙げる事が出来ない。この場合も正確には原資料に当る外ない。

以上の調査から、この時購入した書籍の大半が生物学関係であり、医学書が一冊も見られない事が明らかとなった。

さらに生物学書の内容を見ると、殆んど分類学、博物誌、比較解剖学の分野である。この事はシーボルトの日本での関心や使命とまことに一致するものであり、さらに地理学、鉱物学など他分野の書籍をも合せて見ると、シーボルトの巾広い万有学を十分支えるものであると言える。

また、その書籍の著者達の大半について、現在の科学史書、人名辞典、百科辞典などから調べ得た事は、シーボルトが当時の第一線の学者達の著書を読んでいた事を示している。生物学者に限って見ても、Linne, Lamarck, Humboldt, Cuvier, Oken, Blumenbach, De Candolle, Jussieu など現在の教科書や啓蒙書に登場する人物達である。書籍自身も著者達の近代科学に脱皮した主著が多い。

ところで、シーボルトは来日以前にヨーロッパにおいて、資料中に見られるオーケン、ネース・フォン・エーゼンベック、キュビエさらにゲルトナーの息子の植物学者 Gärtner, Karl Friedrich (1772—1850) に接触している。⁽¹²⁾

また、資料の中の Sprengel の Anleitung zur Kenntniss der Gewächse 1817~1818 は後にシーボルトが宇田川榕菴に与えた本であると思われる。⁽¹³⁾

この資料から、シーボルトが当時の最先端の科学知識をもっていた事がわかり、ドドネウスやヨNSTONなどの博物誌を今だに珍重していた当時の日本において、シーボルトの最新の知識が当時の蘭学者に非常に大きいショックと影響を直接間接に与えたことが考えられる。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

終りに、本研究に対する中村禎里氏と月沢美代子氏の多大な協力と教示に心から感謝の意を表する。

(本稿の一部は、昭和48年10月6日長崎の日本医史学会総会で発表したものであり、本研究は昭和48年度科学研究費補助金によるものである)

注、

- (1) 板沢武雄「シーボルトの第一回渡来の使命と彼の日本研究特に日蘭貿易の検討について」『シーボルト研究』 岩波書店 一九三八
- (2) 板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』 吉川弘文館 一九五九
- (3) 板沢武雄『シーボルト』 吉川弘文館 一九六〇
- (4) 上野益三「本草と博物学」『黎明期日本の生物史』 養賢堂 一九七二
- (5) 上野益三『日本博物学史』 平凡社 一九七三
- (6) 著者名の頭に番号をつけた外は板沢の原文のままである。
- (7) この場合も番号以外は原文のままである。板沢によると、書名43部とあるが、41部しかここでは見られない。
- (8) 前出(5)を参照せよ。
- (9) は板沢の報告資料、〔〕は板沢の「和訳」の番号を示す。
- (10) 調査結果については、不明の点もあり、誤訳など誤りもあると思われるので、叱正、助言、教示を乞うこと切である。
- (11) 前出(4)では、書名40部中動物に関するもの14部、植物に関するもの10部とし、前出(5)では、動植物に関するもの25部としている。
- (12) 呉 秀三『シーボルト先生1』 平凡社 一九六七
- (13) この本は早稲田大学図書館に現存する。『洋学文庫目録』 早稲田大学図書館 一九七一

- (14) もっとも、宇田川榕菴は『シヨメール百科』などによってかなり新しい知識を得ていた様である。
 矢部一郎 江戸生物学史に於ける『厚生新編』と『シヨメール百科』の役割 第20回日本科学史学会年会予稿集 一九七三
 矢部一郎 江戸時代における西欧遺伝学の受容と紹介 日本医史学雑誌 第20巻第2号 一九七四
- (15) 例えば、榕菴はその後『植学啓原』(一八三五)でメルソーンについて記載し、シュツシエーの分類についても吉綱の分類として記述しており、『百綱譜』という稿本を書いた様である。さらに、伊藤圭介あての手紙で「林氏も少し疎く相成申候に付きメルソーン氏などの学則など可宣と奉存候」とし、新しい生物学に目を向けている。
 吉川芳秋 『日本の先覚宇田川榕菴』 名古屋C.A.趣味社 一九三一
 矢部一郎 宇田川榕菴とリンネ分類 蘭学資料研究会研究報告 第二五九号 一九七三 (武蔵大学人文学部生物学教室)

A Glimpse of Ph. Franz von Siebold as Scientist,
 from Materials reported by T.Itazawa.

by Ichiro YABE

Takeo Itazawa (1938) reported on a list of those books obtained by Siebold at Nagasaki from Europe and Batavia in 1825. Inquiry into this list has revealed that these books were mostly on biology with none on medicine. Most of the authors of these books were the foremost scientists in Europe at the time, such as Linne, Jussieu, De Candolle, Persoon, Cuvier, Lamarck, Humboldt, Oken, Blumenbach, Kastner, John, Werner, Breithaupt and so on. Moreover, almost all of them were the representative works of these authors. These facts show that Siebold had up-to-date knowledge of European science despite his residence in Japan. Therefore, Japanese students of Dutch learning owed a great deal to Siebold.

江馬塾における『扶氏経験遺訓』の需要 下

片 桐 一 男

三 『扶氏経験遺訓』の刊行をめぐって

1 その刊行経過について

『扶氏経験遺訓』の出版に関しては、緒方富雄博士の論文と、⁽¹⁾『開版見改元帳 二』⁽²⁾が参考となる。緒方論文は、主として緒方洪庵と箕作秋坪との往復書翰を用いて、初帙(三冊)と薬方編が安政四年(一八五七)の暮に刊行をみるまでの経緯を詳細に紹介されたもので、書物の表紙や刊記からだけでは窺い知ることの出来ない、裏面の実情がわかって興味深いものである。その実際の発売は翌安政五年の初めからの由である。しかし、二帙以下の刊行に関しては、初帙・薬方編と同時に刊行されたものでなく、なお完結までに時日を要したことを言及されたが、その刊行の経緯については詳論されず、

扶氏遺訓が完了したのは何時頃であったか。私の手許にはこれを証するに足る材料はないが、万延元年庚申十二月(一八六〇)に附録の草稿のことを云々した手紙が秋坪の許へ届いてゐるから、完了は恐らくその翌年(即ち文久元年に当る)の早々であつたらう(一八六一)。

と結んでおられる。

『開版見改元帳 二』は、書物の開版(出版)に際して行なわれた草稿見改めの記録である。『扶氏経験遺訓』の「見

改」に關しては、安政四年（一八五七）の、おそらく正月より安政六年（一八五九）十一月までかかって本文編と葉方編が「伺濟」（＝草稿本審査・許可）となり、「附録」は文久元年（一八六一）七月に「伺濟」となった。その順序は、初帙・葉方編、二帙、三帙、四・五帙、六・七帙、附録、の順序である。すなわち、葉方編のみが初帙に続いて早く見改めの手続きがとられたもので、あとはすべて帙順に行なわれたことを知り得る。ただし、「開版見改」は草稿本審査の段階であって、これが実際に刊行をみるまでにはかなりの作業と日時を要する。したがって、この「見改」の記録をもって、刊行を予測することはできない。

江馬信成に宛てられた洪庵の十通の書翰は、これらの諸点において寄与するところ少なくない。近世における出版史の分野においても、書物出版の最終結果段階が確認できる好例ともなり得よう。

そこで、十通の書翰の発信年度の考証を兼ねて、内容を点検してみたい。

まず、内容から発信年を最も明確にし得るものは第四書翰である。文中、「殊ニ先般ハ御大人様御願之通御致仕ニ相成、大兄御家督無相違ニ被_レ為_レニ仰蒙_レ候よし」とある点は、『江馬氏系譜』の「元益」の項において、「万延二年辛酉二月朔、因_レ病乞_レ致仕」にて「二月廿二日」付で許可状が下され、三月朔日に正式に認められ、「信成」の項において、「万延二年辛酉三月朔嗣_ニ家賜禄八十石」と明記されている点に附合する。したがって、第四翰は万延二年すなわち文久元年（一八六一）四月十四日付、緒方洪庵から江馬春齡（信成）に宛てられたものであること明白にして動かない。この本翰において、『遺訓』について、洪庵は三・四・六・七の各帙と葉方編の帙とを各二部づつ送ったといい、初・二・五の各帙分は「切_レニ付」製本が出来次第送ると申し送っている。したがって、少なくとも本翰が洪庵によって認められた文久元年四月十四日現在において、『遺訓』は、初・二・三・四・五・六・七・葉方の各編の刊行をみていたことが判明する。附録のことはまだみていない。

右の第四翰を基準にして、各書翰の内容をみていくと、第一・二・三翰がこれを早まわり、第五・六・七・八・九・十

翰がこれより遅れるものと考えられる。

第一書翰は、第二・三帙分二十部の代金受領の礼を述べ、第四帙も冬中に卒業の積りのところ、まだ少し出来ていないので、「春日早々には卒業」と予定を申し送っている。洪庵がまえまえより『遺訓』の出版を急いでいた事情と刊行分量からして、おそらくは初帙・葉方編の帙が刊行された安政五年の暮十二月二十日の書翰とみるのが順当のようである。

第二書翰は、「遺訓第六帙出来二付一本呈上」といっている。第四・五帙分の刊行に要したであろう日時を考え合せると、本翰は安政七年（万延元・一八六〇）の二月二十二日付の書翰とみるのが順当と思われる。安政六年に繰り上るのは四・五帙刊行に要する日時が短かすぎて無理となり、また、見改めが安政六年十一月によく済んでいる点からも合わない。かといって、万延二年に降ることは、続く七編刊行に要する日時が短かすぎることであり無理であろう。

第三書翰は、第六帙送本に続いて第七帙分も出来につき送本の旨を申し送っている。したがって、第二・三翰はそれぞれ日時を経たものとも思われない。文久元年三月十三日の書翰とみることも不可能ではないが、やはり万延元年三月十三日付のものともみるのが順当に思える。

第五書翰は、「此頃」、備前まで赴いた病用出張から「帰坂」したので返事の遅延したことを詫び、次いで注文にしたがって、「遺訓全部八帙」と初・葉・五・六・七帙分をそれぞれ希望の部数送っている文面である。したがって、第四翰より早い万延元年四月二十九日付の書翰とは見なされまい。かといって、文久二年の四月二十九日にあててみると、洪庵自身の『壬戌旅行日記』によって明白なごとく、その頃の洪庵は中国・四国地方への旅行中で、大坂から発信できるはずもないから、これも無理である。よって、文久元年（一八六一）四月二十九日付の書翰と見なすのが順当と考えられる。本翰にもまだ附録のことはみえない。

第六書翰には、七月来不快のことを述べ、注文にしたがって「扶氏遺訓 全部」を一組送るといい、「附録も」「漸く此頃出来上り候二付、一本呈上」と重要なことを述べている。洪庵は文久二年八月五日に江戸へ向け大坂を出立しているこ

とからして、本翰は文久元年（一八六一）十一月二十五日付の書翰ということになる。見改めが同年七月に済んでいることも、時間的前後関係は矛盾しない。

第七書翰には、「薄紙摺遺訓壹部」を注文にしたがって送本する旨のことがみえ、金額からして、これは既刊分全体（帙）一セットを指すと思われる。したがって、文久二年（一八六二）正月九日付の書翰ということができよう。

第八書翰には、「又々眼病」といい、「薄紙摺 全部一帙」「常製本^{十六帙} 全二部」「附録 十三部」という内容がみえる。同じく文久二年正月十五日付の書翰と考えられる。

第九書翰には、注文によって、「薄紙摺遺訓」を送本したら、代金一両三步の送金があったので、その受領を謝し、「久々風邪平臥」のため礼状の遅くなったことを詫びている。したがって、これまた文久二年二月二十日付の書翰と受け取れよう。

第十書翰は、注文により、「遺訓附録三部、通論一部、一部」を送本した旨の送り状である。したがって、これもまた前便に続く文久二年二月二十七日付の書翰と考えられる。以上のことを一表にまとめてみれば次のごとくならう。

『扶氏経験遺訓』刊行経過関連記事

邦 曆	西 曆	緒方論文による判明点	『開板見改帳』による判明点	江馬信成宛て緒方洪庵書翰による判明点 (右肩の数字は書翰番号)
安政四 丁巳	一八五七	暮十二月十七日、初帙（三巻） ・薬方編出来	初帙・薬方編同済	
安政五 戊午	一八五八	年初から発売？ 正月十日、初帙九匁（二朱）、薬方 六匁		

<p>文久二 壬戌</p>	<p>万延二 辛酉</p>	<p>安政七 庚申</p>	<p>安政六 巳未</p>
<p>一八六二</p>	<p>一八六一</p>	<p>一八六〇</p>	<p>一八五九</p>
<p>八月五日、江戸へ出立</p>	<p>早々完了カ</p>	<p>十二月に附録の草稿を云々した手紙が 洪庵から秋坪へ届いている。</p>	
	<p>七月廿五日、附録</p>		<p>三月十五日、初帙・薬方編、 刻伺 十月四日、三帙改 五月八日、四・五帙改 十月廿五日、六・七帙改</p>
<p>⑦ 正月九日、薄紙摺一部 ⑧ 正月十五日、又々眼病 薄紙摺 全部一帙一両二分 常製本 十六帙二部、八帙一両 附録 十三部 ⑨ 二月二十日、薄紙摺一部 一両三步 久カゼ平臥 ⑩ 如月廿七日、全部、附録</p>	<p>④ 四月十四日、大人致仕、信成家督 通論一部 ⑤ 四月廿九日、社中へは全部金一両 備前病用出張から帰坂 全部 ⑥ 十一月廿五日、七月来不快 附録ようやく出来</p>	<p>② 二月廿二日、年始カゼ平臥、六編出来 ③ 三月十三日、七編出来</p>	<p>① 十二月二十日、二・三編出来 業予定 四編冬中卒業之積、早春卒</p>

文久三 一八六三
 亥
 六月十日、江戸で病歿（五十四歳）

次に、洪庵の書状にみえる「常製本」と「薄紙摺本」との関係ならびに、そのそれぞれの売価について比較しておきたい。一覧表を作成して示せば次の通りである。

2 常製本と薄紙摺本とその売価

『扶氏經驗遺訓』巻・冊・帙 関係一覧

帙	巻	常製本 冊		薄 刷 本 冊 (江馬本)
		順天堂本	慶応本	
1	本論	1	1	1
		2		
		3		
2		4	2	
		5		
		6		
		7		
3		8	3	
		9		
		10		
		11		
4		12	4	2
		13		
		14	5	
		15		
		16		
		17		
5		18	6	
		19		
		20		
6		21	7	
		22		
		23		
7		24	8	
		25		
		26		
薬方編	薬方	1	9	
		2		
附録	附録	1	10	
		2		
		3		

これをもってみるに、常製本の内容は本編が二十五巻、薬方編二巻、附録三巻の計三十巻より成っている。その冊数は、順天堂大学医史学教室本によれば上の表のごとく二十五冊となっている。巻之六・七が一冊、巻之十三・十四が一冊となっており、薬方編は巻数通り二冊となっている。附録は欠

けており不明である。慶応大学医学部医史学教室蔵本は、ほぼ帙数と対応している。ただ第四帙（巻之二十一・十七）が二冊に分かれている。薬方編は一冊にまとめてある。附録も一冊にまとめられている。次に江馬家本の薄刷本をみるに、表のごとく三冊に合本されている。附録が欠けている。附録のついている薄刷本はまだ確認していない。

代価に話を移そう。

第四輪をみると、常製本が全部（一七帙と薬方編の一組）で金一両とある。端本は算用が六ヶ敷いので定価通りといっている。

そこで端本の場合を考えてみるに、安政五年正月十日現在で、

此度上木之初帙は九匁（二朱也）。薬方は六匁と価ひ相定め申候。両方にて大阪銀十五匁に相成り、金にては三朱と百四十文に相成申候（後略）

とあるから、初帙は銀九匁（金二朱）、薬方編は銀六匁ということがわかる。

第一輪をみると、二帙三帙二〇部で六兩一分であるとみえる。これを、かりに均等に割ってみると、二帙三帙ともそれぞれ一部につき金二朱半という計算になり、銀になおせば十一匁 $\frac{1}{2}$ となる。金半朱（五〇〇文）の値上りということになろうか。

第五輪において、洪庵は薬方編六匁を一朱でもよいといっている。前の計算からすれば、一匁半安くてもよいといっているのである。

第七輪で、薄紙摺本一部につき、書林売りは銀三枚、社中には金一兩三分といっている。これは何程の差をつけていることなのか。これを、明暦ごろ以後の公定相場金一兩およそ銀六〇匁をもって換算すると、銀三枚一二九匁計算で二兩強となるから、結局、社中へは書林売りより一分値引きしてあげようということになる。ただし、前記九匁 $\frac{1}{2}$ 二朱の計算からすると、これは一兩三分となって、割引いたことにならない。これはどうしたことか、変動期のカネ勘定の六ヶ敷いところである。

第八輪では、薄紙摺本は「当時一兩式分売」であるが、社中へは「五百疋」と相定め、常製本ハ全八帙で「一兩」と相定めるとしている。端本は計算がしにくいから旧来通りの定価としている。ここで判明することは、常製本と薄紙摺本と

では後者の方が二分高いことである。次に、またここで書林売価と社中頒価との相違を点検してみたい。一疋十文計算とすると、錢五百疋は五千文すなわち金一兩一分に相当することになり、結局、社中へは市価より一分引いていることが判明する。全体に若干安価になっている。

ところが、第九輪をみると、薄紙摺本がまた金一兩三步といっているから、若干値上りしたことがわかる。

要するに、常製本と薄紙摺本とでは後者が幾分高価であること。常製本全部は文久年間までほぼ金一兩と一定のようであったが、薄紙摺本一部は金一兩二分から二兩くらいの間を上下していたらしい。そのいずれにしても書林売価（市価）よりも社中頒価は一分程値引きして渡されたらしく、これはほぼ一割五分引くらいに相当する。端本売りは計算が六ヶ敷いので、刊行時に決めた分売価格で、変動も割引きもなしで頒布されたらしいことがわかる。このような煩雑な金銭勘定まで江馬信成にとりまともてもらっていたため、緒方洪庵は毎度「御氣之毒千万」と「恐縮」し、その「手数」を「多謝」しているのである。

四 江馬塾の盛況

江馬信成の注文を受けて、緒方洪庵が自著の『病学通論』と『扶氏經驗遺訓』との両刊本を送本し、その代価を受領したこと、などに関する一連の書翰の内容を追って、思わず『扶氏經驗遺訓』の刊行過程を追究することに熱を入れすぎてしまったようである。

いずれにしても、江馬信成は緒方洪庵の訳著が刊行をみると、早速注文していたらしく、洪庵の書翰に、「出来次第差上可_レ申候」とみえ、「某帙出来ニ付一本呈上」ともみえている。洪庵また「御入用方々、早_レ被_レ仰下_二度、早速差出可_レ申候」「尚亦御入用高被_レ仰聞_二可_レ被_レ下候」と「御社中御入用も候ハ、御申越可_レ被_レ下候」などと注文を取っているのである。信成の発注部数はなかなか多く、書翰にみえる限りでもおそらくは各編十一〜十三部くらいを数えている。したが

って、洪庵また「毎々多分ニ御世話被_レ下奉_レ多謝_レ候」と信成が塾生や社中の面々に斡旋してくれる労を謝し、入金に際しては「毎々御手数数相懸ケ候義、御氣之毒千万奉_レ謝候」とも「毎々御手数数恐入申候」とも、恐縮している。たまたま遺っている書翰においてさえも、かかる具合であったから、まだまだこのほかにも信成の江馬塾を通じて『遺訓』の需められた例は多かつたことと察せられる。前記の入門者数とともに、江馬塾の盛況振りの一端をみる事ができよう。

それにしても、江馬信成におけるこのような『扶氏経験遺訓』の需要は、彼の父元益（藤渠・活堂）ゆずりのものであつたらしい。元益の随筆『藤渠慢筆』をみると、注目すべき一節がみえる。その「初編 二」の二十五丁目に次のごとくみえる。

一 和漢西洋ノ医籍甚タ多シ、然レ無益ノ理ヲ論スル書多ク、今日ノ实用ニ便ナル書鮮シ、漢書ニテ傷寒論・温疫論冠タルモノナリ、西洋ニテハ扶氏経験遺訓ヲ必用ノ書トス、和人ノ著書ニハ水戸ノ本間元調（マツダ）カ瘍科秘録ニ勝ル書ヲ見ズ

右により、少なくとも江馬家第四代元益・第五代元義（信成）ともに『扶氏経験遺訓』が当時における総合的な医学書たることを認識して、これを用い、これを社中に斡旋したのである。『藤渠慢筆』の右の記事の上部欄外には追筆で、

近來独乙都ノ医書多ク舶來シ、今ノ医之ヲ喜ヘレ、扶氏遺訓ニ及バザル_レ遠シ

と書き入れがされている。明治に入ってからからの書き入れと思われる。これからしても、なかなか江馬塾において『扶氏経験遺訓』の需要とその利用は続いたものと察せられる。

註

(1) 緒方富雄博士「緒方洪庵『扶氏経験遺訓』の出版」〔蘭学のこと〕昭和二十五年、所収。

(2) 日比谷図書館所蔵、横山健堂氏旧蔵本。

〈附記〉

江馬家史料の調査について、筆者は、青木一郎氏の御勧誘と江馬庄次郎氏の御理解とによって、昭和四十六年の秋以来個人的に継続してきた。その後、参集者も増え、昭和四十八年からは江馬文書研究会（江馬庄次郎氏をはじめ、青木一郎・青木允夫・岩崎鉄志・齋藤信・杉本勲・竹内幹彦・田崎哲郎・富安広次・安井広の諸氏と筆者）が組織せられ、史料の整理と調査が行なわれている。本稿は右の成果の一つである。

（一九七三・一一・一五、稿）

西説内科撰要について (五)

大 滝 紀 雄

18 痙攣搐掣篇

右の表題は「増訂」のもので、「西説」ではカランプ・ストイプテレッキング Krampf en Steup-trekking となっている。Tetanus ないし Convulsio のことである。漢医のいわゆる痙、痙、搐掣、驚風、掣引、拘急、角弓反張などが皆これに属すると注されている。

本篇を理解するためには、まず現在の痙攣の概念を知っておく必要がある。

痙 攣 緊張性 tonic
間代性 clonic

痙攣とは筋が不随意に急激に収縮する状態をいうもので、これに緊張性ないし強直性のもものと間代性のもものとがある。いずれも中枢神経の異常によっておこるものである。間代性痙攣は搐掣(チクデキ)またはクローヌス Clonus と呼ばれ、筋が不随意的に律動的に収縮を反復するもので、膝搐掣、足搐掣などがある。ヒステリー、てんかん、脳腫瘍などのさいにみられ、おそらく錐体路性の障害と考えられる。

ところで、「西説」や「増訂」では、痙攣搐掣の定義はつぎのようになっている。意志に従って運動する諸筋が自由に運動屈伸することができず、かえって意志に逆って自然に攣縮する。また、胃腸の筋線維のような不随意筋が牽引攣縮す

る。こうした状態を痙攣ないし搐掣という。これを次のように二大別することができる。

痙攣 搐掣
カランブテレッキング ≡ Tetanus ≡ 痙攣
ストイプテレッキング ≡ Convulsio ≡ 搐掣

カランブテレッキングとは「其証長ク緩弛セスシテ、稽留固滯スル」(西説)「攣急依然トシテ放緩セズ、強硬ニシテ緩弛セズ、少シモ伸縮挙動スベカラザル症」(増訂)すなわち、痙攣が長時間続いたままの状態をいう。

ストイプテレッキングとは「其休止スル時テ、復タ強ク発ル」(西説)「其症発止往来アリテ頻々ニ牽引掣抽スル」(増訂)すなわち、暫く休むかと思うと、また痙攣がおこる状態をくりかえす。これで見ると、当時の痙攣に対する分類法と、現在の tonic と clonic とに分ける考え方と殆ど全く同じであるといえる。

しかしそのメカニズムの解釈はおよそ現代ばなれしている。すなわち、死体では痙攣がおこり得ない事実から、生体での諸種の運動は精気が(体内に)灌注するためにおこると説いている。精気が筋線維に強く入ると攣縮がおこる。その入り方が甚だ強ければ、連続的な痙攣すなわちテタヌスがおこり、時々休みながら入る場合にはクロロヌスになるという生気論的解釈にはかならない。

本症の原因には次の場合がある。

① 脱血(貧血)によっておこることがしばしばある。ことに脳に行く血流が少ない場合、すなわち貧血のさいにおこる。婦人の産後、水腫患者の腹水穿刺後、下痢のひどいときにも痙攣がおこる。

② 多血のさいにもおこる。ことに脳が充血した場合、痔出血が止ったり、月経閉滞後にも痙攣がおこる。

③ 神経(精神)の感動によっても痙攣がおこる。子宮衝逆(ムールスペル Moerspel)、少女子におこる舞踏病(St. Vitus Dans) などいふが如く。

④ 初生児の痙攣は胎尿(胎便)中に毒が残り、体外に排出されないためにおこる。

痙攣治療の薬剤としては白罌粟、阿芙蓉、蜈蚣石などが用いられている。

19 頭痛篇

定義 この症状は他のものどちがつて、患者が自ら頭痛を訴えるので、その診断はきわめて容易である。

分類 次のように分類されるが、分類したところで、治療法が異なるわけではない。

セパラルジア Cephalalgia 今までなかった頭痛が新に発した場合

セバラア Cephaloia 以前からあったり、時々発作的におこる頭痛

ヘミカラニア Hemiprania 頭痛が一方に偏る場合、漢医のいわゆる偏頭痛

カラヒス Clavus 丁子痛、限局性頭痛

頭痛の原因と治療 生体では精気が神経の中を通過して、知覚を司る諸臓器に向う。また、血管の運動によって血液が循環するが、正常の血液ならばたとえ頭に昇っても、頭痛はおきない。熱毒が頭に昇った場合、この熱のために頭痛がおこる。

次の場合にも頭痛がおこる。

- ① シンキンゲンのあるとき
- ② イイグトの酷厲液が脳膜に浸淫したとき
- ③ うつ液によるとき

④ 胃と頭は遠く隔っているため、無関係と考えられるが決してそうではない。頭痛があれば食欲不振となる。その反対に胃に悪液質があれば、大抵頭痛がおこる。従って頭痛のある場合には胃腸を正常にすることが必要である。

治療としては刺絡瀉血、また、清涼な下剤を用いること。

以上で頭脳の病気が終わり、次の喉風篇一篇は頸部の病気（病属頸項）である。

20 喉風篇

ラテン語でアンギーナ安及那 Angina という語がしばしば使われる。ふつうこれを咽喉（喉頭）Keel, Larynx の焮衝（炎症）Ontsteking (Inflammatio) と訳すが、咽喉炎はアンギーナの一部分に過ぎないから、むしろそのままアンギーナというか、喉風 Bruin in de Keel というのが正しいという文章で本篇は始まっている。ただし、焮衝という字は「西説」にはまだ現われず、「増訂」になって現われ、炎症という文字が使われ始めたのは明治以降と思われる。

Angina は現在では絞扼感をおこす疾患の総称で、狭心症 Angina pectoris、腹部アンギーナ Angina abdominalis 等を別にする、ふつう咽喉炎、扁桃炎に限局し、喉頭炎は除外されているようだ。ちなみに「扶氏經驗遺訓」では喉風という文字は影をひそめ、咽喉焮衝 アンギナ（羅）ケールオンステーキング（蘭）となっている。

喉風というのは咽喉 Pharynx、喉頭の一方または両者に障害があるもので、これにかかると、「呼吸の障害と嚥下などの飲食障害がおこると説明する。現在の解剖生理学的知識からみても、喉頭は気管の上端に位置するもので、飲食物が气道へ紛れこむのを防ぐ閥所のような役割を演ずると共に、呼吸器との関係も深く、発声器にもなっている。

喉風と紛らわしいものに、次のいくつかがあがるが、それらは除外される。

- ① 肺病で呼吸が妨害された場合
- ② 食道や胃の病気で、諸筋が痙攣をおこし、嚥下障害をおこした場合
- ③ 鼻中息肉 ポレイプス Polypus を生じて咽門に垂掛した場合
- ④ 魚骨のどにひっかかった場合

⑤ 子蔵衝逆の場合

喉風の診断はむづかしい。というのは腫脹が表にあらわれにくく、また喉風のでた場所を直接目でみるのが困難であるから。

喉風には二種類がある。第一は真性の喉風 *ware Bruin* で、悪寒振慄を伴って始まり、咽喉が狭窄促進する場合である。第二は他の熱病にさいして、熱毒が二次的に転移した場合である。

ロース *Roos (Erysipelas)*、もしくはオンスターキング（炎症）によってもおこる。これらが頸の外面に発したり、咽喉の中でも覗いてみえる場所にできた時には危険が少ないが、内面の見えない場所にできると危険である。

咽喉の内面はスポンス *spons (スポンジ)* のようにもろく、軟かく、粘液や滑液が存在して、いつも乾燥しないように侵している。これがうっ滞して腫脹すると寒液腫（増訂）では粘液腫（*増訂*）となる。すなわち巴旦杏核アマンデレン *amandelen*（現在の扁桃）周辺に浮腫炎症がおこる。

諸筋の痙攣によりアンギーナがおこることもあり、このさいは刺絡などにより痙攣を取り除くことが肝要だ。本篇では細字の注釈が多く、訳者がかなり自信をもって説明しているようである。

* 原著では *Slymgezwel, slym* は現代つりでは *slijm* 粘液の意味、*gezwel* は *tumor*

** 「解体新書」巻二唇口篇第七にみる。

21 咳嗽篇

本篇から 25 喘急篇 まで病属胸膈（増訂）では病属胸脇）である。

喉頭に刺激があると、（刺激の原因物を）排除しようとするために、肺の線維や腹筋その他、随意筋、不随意筋が一致協力して咳嗽 *Tussis, Hoest (en)* の運動をたすける。したがってせきは生体における良能、すなわち天然自然の妙であ

る。せきのできる場合には次の数種類がある。

大気中の異物を吸入したとき、

飲食物が誤って気管に入ったとき、

熱病や感冒のとき、

肺や胸内に膿があるとき、

喉頭の内膜にロースや炎症があるとき、

胃内の消化機能が衰えたとき、

などである。

また、せきのであるときは粘液が稀釈されて痰を伴なうことが多い。痰にも濃淡がある。肺臓に膿瘍のあるとき（肺化膿症、肺結核？）、吐血（喀血）ののちせきがでる。胃の悪い場合にもせきがでるが、痰のであることは少ない。せきが長く続くと嘔吐する。

治療薬としては、テリアカ、アンチモン、サフラン、葡萄酒、白ケシのシロップ等が用いられる。

本篇も「西説」は分りにくく、「増訂」の方がはるかに理解し易い。

22 吐血篇

吐血はオランダ語の *Bloed-spuwen*、ラテン語の *Haemoptysis* と書かれているから、現在われわれのいう肺組織からの出血、すなわち喀血のことである。口や鼻からでる出血をすべて吐血というが、肺からでるものを特に吐血という定義している。それでは現在用いられている吐血、すなわち消化管からの出血を当時は何と表現していたのであろうか。

26 呕血篇 として一項が設けられているように、呕血という言葉が現在の吐血にはかならない。したがって、ここで述

べられている吐血はすべて喀血のことである。

症候としてはまず咳がでて、その後吐血する。肺管 Long-pyphen (Fistula pulmonalis) には動静脈が循環しているが、これが破綻して血液が肺管に入ると、重力で降沈するため、血液がひじょうにでにくくなる。そこで、咳と共に肺に入った血液を外に出そうとして、吐血がおこる。また、吐いた血は必ず泡沫があるが、これはヒポクラテスの医術篇 *Medicina Hypocratica* の二〇六条に記されている。

吐血の量は多量のこともあるが、数条の血線紅縷を帯びる場合もある。

吐血後に膿 *Eiter* を吐出する場合は(膿胸、肺結核)、たとえ年少者であっても手遅れで予後は悪い。ヒポクラテス医術篇三四〇条に書かれている。

吐血の原因にも種々あり、咳をしたり、大声で歌ったりする場合だけでなく、胸腔が狭い場合もあり、父母の遺伝や素質にも関係する。

治療法としては、細血管の破綻を止めるか、凝固剤を使用すればよいわけだが、実際問題としては容易でなく、むしろ血流を減ずるために刺絡瀉血するのがよい。刺絡は一月または二月に一回行なう。

「増訂」では血液循環に関する玄真の細字の注釈がある。毛細血管と血球についての当時の学説として興味があるので記載しておく。

血脈ノ末抄相連テ血ヲ授受シ常ニ運回循行スルノ環ノ端ナキガ如シ、或ハ其末抄相連ラザル者ハ甚微細ニシテ諸部ノ腺或ハ諸器ニ連リ皆赤血通セズシテ唯他ノ諸液ヲ通ズルノ譬バ動脈ノ末抄ハ蒸気、汗、尿、津唾、腠液ヲ出シ、或ハ咽喉、気管、胃腸等ノ液ヲ滲出スルガ如シ。静脈ノ末抄ハ即チ嚙尿管ノ如シ

○シヨメールニ云ク、顕微鏡ヲ以テ血の脈中ニ行ク者ヲ監察スルニ其体皆極テ微細ナル赤色ノ円球ニシテ相接続シテ運
行スルノ宛モ珠ヲ貫ク如シ

もちろん現代医学からみれば誤りだらけではあるが、本書より約四十年前の「解体新書」の記載と比較すると一歩前進した考え方である。

* *varices* 「増訂」では細血絡と訳されている。細動脈のことであろう。

23 胸脇痛篇

胸脇痛は *Pleuritis* ないし *Zyde-wee* といわれるもので、肋膜 *Pleura* の痛みによっておこる。肋膜とはすでに筆者が三、細字の注釈と引用書で記したとおり、二枚の膜から成り、外側は胸廓に接し、内側は心、肺を保護する。肋膜は敏感で疼痛を感じ易く、呼吸により伸縮弛張する。

炎症、ロース（丹毒）、熱病、傷冷毒、痛風（リユーマチ）、壞液、痙攣などの原因が肋膜に作用することによって胸脇痛がおこる。

24 肺痛篇

肺痛とは *Peripneumonia*, *Longe-wee* のことである。必ず稽留熱を伴っておこる肺の痛みである。若し熱がなければ、次篇の喘急と考えられる。肋膜だけでなく、肺にも障害がおこるので、脈も軟弱で数が多い。

原因は炎症、ロース、熱病などが肺を冒すためにおこる。

特徴としては、胸脇痛に比較すると痰の量が多い。

胸部の疼痛
肺 ↓ 肺痛
肋膜 ↓ 胸脇痛

現代医学からみれば、胸痛を肺痛と胸脇痛に別けて説明するのは納得がいかない。また、胸痛の発生機転が脊髄の神経支配をうけていることに関しての記載は全くない。しかし … *de Long geen gevoel-zenuwen heeft.* “肺には知覚神経

がないという原文の説明として、「増訂」の細字の注は斬新である。

肺臓ハ神経多ク布蔓スト雖モ専ラ運動ト營養トノ用ニ供セシメ殊ニ知覚ノ鋭敏ナル神経ヲ具ルコトナシ

25 喘息篇

ラテン語でアスタマ Asthma と書いてあるから、現在の気管支喘息のことであろう。その症状は呼吸不利で促進するから、肺痛とよく似ているが、肺痛は熱があるのに対して、本症はそれがないので区別できる。

ここでも、吐血篇で述べたように、肺に分布する細動脈の末端から粘液が分泌されるという仮説に基づいている。ふつうは粘液が適量に分泌されるので、これが静脈に連なる嚕尿管に吸収され、粘液は収支のバランスがとれて、肺は一定の湿潤を保つことができる。しかし分泌量が多過ぎたり、膠粘であったり、老人などで肺機能が悪かったりすると、肺管にうっ滞がおこり喘息がおこる。また、痰がよく排出されれば喘息は軽快するが、痰がきれにくい時は治癒しにくい。

喘息の原因は右のほか、次の場合がある。

- ① 粘液でなく水液が肺に入ったとき
- ② 肺の運動が衰弱したとき
- ③ 痙攣による喘息発作をおこし、痰がきれにくいとき
- ④ 血液の粘稠度がたかまった場合には、凝固しやすくなるので喘息がおこる
- ⑤ 血球増多のとき

現在の気管支喘息、心臓性喘息などの概念とはおよそかけ離れている。今ではアレルギーなしに喘息を語ることはできないが、この医学用語さえなかった当時としては、右のような種々の憶測は一応もつてもであったかも知れない。

* アレルギー allergy の概念は一九〇六年 V Pirquet により始めて提唱された。

以上で病属胸膈が終わり、26篇より46篇までが病属腹肚である。

26 嘔血篇

嘔血^{*} Vomitus cruentus はすでに 22 吐血篇(咯血篇)で述べたとおり、現在の吐血にはかならない。したがって、

同篇を参照すると共に、現在の咯血と吐血の鑑別点を簡単に表示しておく必要があると思われる。

「増訂」に書かれている「嘔血ノ大較」(吐血の定義)を次にかかげる。

表 1

西説・増訂	吐血	嘔血
経験遺訓	咯血	嘔血
現代語	咯血	吐血
英語	hemoptysis	hematemesis
原因	気道からの出血	消化管からの出血
主な病気	肺結核	胃潰瘍・胃癌など
排出状況	咳を伴う	嘔吐を伴う
血液の色	鮮赤色	暗褐色が多い
性状	泡沫を含む 凝固しにくい	含まない しやすい
混合物	粘液・膿	食物残渣

嘔血ハ……肺ヨリ来ル吐血ニ比スレバ甚ダ辨シ易シトス。何トナレバ嘔血ノ症タル、通例先ツ悪心有テ血ヲ嘔スレバナリ。故ニ大抵一頓(イチド)ニ許多ノ血ヲ吐シ、黯赭色ニシテ多少凝固シ、或ハ粘液、或ハ他ノ諸液食物等ヲ雜ヘテ胃中ヨリ吐出ス。故ニ其吐スル所ノ物、種々ノ形色臭気アリテ肺ヨリ出ル吐血ノ如ク泡起スル(泡立ツ)コト稀ナリ。

これを現代語に翻訳さえすれば、殆どそのまま現在の医学書として通用すると思われる。

療にあたっては収斂止血剤などを用いてはいけない。水と牛乳などを飲ませて、胃中の残留物を洗滌し安静を保つべきである。食事はしばらくの間絶食を基本とするがよい。

また、門脈の血が逆流して胃から嘔血すると説いている。現在では肝硬変など門圧亢進症の原因があるときには、門脈

は正常の血流が障害され、胃冠状静脈、食道静脈、奇静脈を経て上大静脈に至るバイパスを作ることが知られている。そして、食道静脈瘤が形成され、これが何かの原因で破裂するときには大吐血をおこすことがある。当時と現在とは、メカニズムは全くちがっているが、吐血のさいに門脈を考慮していたことは、すぐれたアイデアであったと思われる。

* 文化十四年成刻の「蘭方枢機」では本書と同様、吐血、嘔血だが、緒方洪庵訳の「扶氏経験遺訓」第九篇失血病の項では失血を「衄血、咯血、嘔血」と訳している。「内科撰要」でいう嘔血はそのままだが、吐血という語はすでに咯血に改められている。その後ボンベ長崎滞り時代の関寛齋の「長崎在学日記」や当時佐藤尚中の翻訳したウンデルリヒの結核書翻訳をみても、ウかんむりのない咯血の文字が使われている。

Seisetsu Naika Senyo (5)

by Toshio OTAKI

Chapter 18 Convulsions

Kramp Trekking=tetanus=Tonic cramp

Stuip Trekking=convulsions=clonus

Chapter 19 Cephalalgia (headache)

Cephalalgia contains Cephaloea. Hemicrania (Migraine) and Clavus (headache retracted within narrow limits).

Chapter 20 Angina

Bruin in de Keel means angina or inflammation of the larynx.

It seems that this angina includes laryngitis pharyngitis and simple sore throat.

Chapter 21 Tussis (cough)

Chapters 22 and 26

Hematemesis and hemotpoe are described in these chapters.

Chapters 23 and 24 Chest and pleural pain

from lung origin=chest pain

chest pain

from pleural origin=pleural pain

Chapter 25 Asthma

Asthma appears to be chest pain, but the former is not accompanied by fever, while the latter is accompanied by fever.

日本医史学会例会記事

三月例会 三月二十三日(土)

於順天堂大学医学部九号館二階二番教室

- 一 越後の蘭方医森田兄弟について
本講演は本号より原著として掲載する。
片桐一男・長谷川一夫

二 授進医会のはじまりについて

佐藤美実

三 見聞記にみる江戸時代の疾病

立川昭二

本講演は次号に原著として掲載。

四月例会 四月二十七日(土)

於慶応義塾大学医学部北里記念図書館第一会議室

一 八王子で発見された徳本流

進藤恵久

二 スカルパの頭

藤田尚夫

三 江戸幕府侍医伴氏の系図—史料供覧—

伴七三雄

本講演の要旨は次号に掲載。

五月例会 五月二十五日(土)

於順天堂大学医学部九号館二番教室

- 一 今日に生きている病氣平癒祈願小絵馬奉納の実態調査報告

相見三郎

二 佐藤進の「渡洋之記」(明治二年のドイツ留学日記)

小川鼎三

本講演の要旨は「順天堂医学」20巻2号に掲載

精神医療史研究会編「呉秀三先生—その業績」

岡田靖雄氏を中心とする精神医療史研究会の人々の努力によって、我が国の精神医学の事実上の創始者である呉秀三の業績目録が上梓されるに至ったことはまことに喜ばしい。目録とは云つても六二〇頁からなる大冊で、項目によってはかなり詳しい紹介がなされており、きわめて多方面な活動家でありながら、しかも一個の強烈な個性によってみごとに統一された人間呉の生涯と業績をうかがうにたる好著である。

全体を資料篇、呉先生の著作、呉先生に関する評伝、付録の四部分に分ち、そのうち呉先生の著作の部はさらに、精神科医療、精神医学、司法精神医学、精神医学史、医学史、啓蒙、雑の七部から成っている。

精神医学は医学の各分野の中でも、とりわけ社会科学的要素が強く、ラボラトリーの外での活動が特に重要視される。そして、そのためには豊かな人間性と広い視野をもった人材が望まれるわけだが、本書を通読してみても、呉を我が国の精神医学の創始者に持ち得た幸福に思い至らずにはいられない。

編者の一人岡田氏が序文「呉先生との出会い」の中で、感動的に紹介しておられる呉秀三、樫田五郎著の「精神病者私宅監置の実況」は、本書中にも、やや詳細に抄録されているが、各症例報告の行間に、呉らの患者によせる真摯な同情と、行政当局に対する痛憤、そして自分自身の無力への焦躁とがにじみでいて読む

者の心をうたずにはおかない。この呉らの報告は大正七年（一九一八）になされたものであるが、問題の私宅監置の撤廃は実に昭和二年（一九一五〇）制定の「精神衛生法」第四八条二項（一ヶ年の猶予期間つき）まで待たねばならなかった。私はすぐ嘗てピセートル病院の患者を鉄鎖から解放したピネルとの対比に思い及んだが、表面的な技術先行乃至偏重の明治以後の日本医学の歴史の暗い側面をみる思いで暗然たらざるを得なかった。

呉秀三はまた我が日本医史学会にとっても重要な足跡をのこした人物である。昭和二年機構としての日本医史学会が確立された際に初代の理事長をつとめたのは呉であったし、『シーボルト先生其生涯及功業』、『華岡青洲先生及其外科』、『吉益東洞全集』、『ケンフェル江戸参府紀行』、『箕作阮甫』、『呉氏医聖堂叢書』、『日本産科叢書』などの広翰な著書、編書が斯学の発展のためにはたした貢献は周知のところである。本書はこれらをも含めて、呉の医学史上の論説を細大洩らさず収録して、ただちに原典に拠る便宜を提示している。

なお本書に収載されていないもので、呉秀三に関する資料として評者の思いあたるものを次に記しておきたい、

斎藤茂吉歌集『遍歴』中に次のような歌及び文がみられる。

（大正十二年）十二月三十日（日曜）

雪ふみて南方墓地にシーボルトの墓をたづねぬ雪ふりみだる

（大正十三年）一月五日（土曜日）

雪つもる南方墓地にシーボルトの子の墓たづねけふも吾ゆく

一月九日（水曜）、呉先生のシーボルト研究のため民族博

物館を訪ひ、Dirr 教授、Schermann 教授に会ふ。Lex 君同道す

シーボルト関係の日本物見むとしてカンテラの火をともして行くも

これらはシーボルト渡来一〇〇年（一九二三年八月一日）を記念して、一九二四年中に行なわれた諸行事に際して呉の著わした論文、講演、及び一九二六年に刊行された『シーボルト先生生涯及功業、増訂第二版』に間にあわせるために恩師の依頼を受けた茂吉が奔走した折の作品であると思われる。

「最後のあとがき」の中で、岡田氏は本書の補緯作製から進んで、『呉秀三伝』、『呉秀三著作集』刊行の抱負を述べられ、そのための組織として「呉秀三先生記念精神科医療史研究所」設立の構想を述べられている。本書刊行に対する感謝とともに、今後の御発展を切望する。（大塚恭男）

松沢病院医局内呉秀三先生業績顕彰会刊、非売品（会員頒価送料とも八〇〇〇円を添えて、世田谷区上北沢二一七一、同病院医局気付精神医療史研究会に申し込む）。なお同病院で、次の二点の著書もだされているのであわせて紹介しておきたい。

精神衛生法をめぐる諸問題（送料とも一〇〇〇円）
松沢病院九〇年略史（送料とも二〇〇〇円）

佐道正彦著「日本の母子衛生」

母子の健康に関しては古くから問題となっていた。それは「戦力・労働力に關係した国家の人口政策としての性格をもっとも強

く付与された部門」として大きな意味を持っていたからである。最近では「生涯の出発点であり、最初の条件として、その後の生活・健康状態に強く影響を与えていく、胎内生活・周産期・乳児期の衛生状態は人間の健康にとって決定的位置にある」という考え方から母子衛生が重要視されている。

本書「日本の母子衛生」では、明治初期より昭和四十七年迄の国内文献一千百余を紹介し、日本人の母子衛生活動の跡をふり返っている。

「明治・大正期の母子衛生問題」の項では、日本で最初の衛生統計である衛生局報告（明治十年）を中心に「官庁統計の整備過程」を概説し、やがてヨーロッパ衛生学を受けて（導入して？）明治十五年以後に顕著となった「乳児死亡問題」を述べている。続いて、資本主義近代産業の育成を促した結果多く生じた女性労働者への衛生調査が行なわれ、大正になって「地域集団を対象とした調査がなされて、大正から昭和初頃には各地で乳児に関する調査が行なわれた」事が列記されている。

「昭和前半の母子衛生問題」では、第二次世界大戦迄の不安定な社会に反映した母子衛生の推移を見せてくれる。これによると、大正末から昭和前半期にかけて「出産と乳幼児死亡」の關係についての調査が多く見られるようになり、母体保護と児の健康の因果關係を明らかにしようとする姿勢が見られてきている。そしてこのような姿勢か心「妊娠出産管理」「労働妊産婦保護」への考え方が持ち出された。それは単に都会のみではなく農村社会へも拡大されていたことを知る。

「第二次大戦後の母子衛生」になると、単なる乳幼児死亡の問題だけでなく、未熟児発生と発育の調査研究が多くされるようになったことを示している。また、優生保護法の制定（昭和二十三年）により、戦前影の薄かった人工妊娠中絶と受胎調節の問題がクローズアップされてきた。

著者は最後に「高度経済成長と人づくり」の項で昭和三十五年以後の母子衛生を通過している。「周産期死亡調査」「妊娠中毒症後遺症」など近年特に重要視され、「自宅分娩から施設分娩へ」という分娩環境の変化にもなった様々な調査も見られる。さらに出生後の児の問題として、「肢体不自由児」「精神薄弱児」「先天奇形」等に関する論文が多角的に見られる。また現在問題となっている「森永砒素ミルク事件」「胎児性水俣病」「サリドマイド奇形」「大気汚染」など「環境汚染と母子の健康」についての文献をも取り上げ、明治以後の母子衛生の問題を今日の問題につなげている。

本書は数多い文献を要領よく紹介しながら問題点ごとにまとめている。著者が緒論で述べているように『社会医学固有の課題の一つ、過去の調査・研究の立場と方法の批判的継承』を「文献解題」の形式を借りて試み、あわせて母子衛生の現代的諸課題を解決するための、いくばくかの方法的寄与をめざす」という目的を本書は多少とも果していると思う。

また医学関係者としては「序にかえて」の「歴史科学としての社会医学」という一文に興味を覚える。巻末の統計調査文献目録は大いに役立つ。

（蔵方宏昌）

（形成社刊、昭和四十九年発行、定価三二〇〇円）

増岡敏和著「民主医療運動の先駆者たち」

昭和初期からの左翼医療運動とくに無産者診療所についてのかなり膨大な記録であり、はげしい弾圧時代、文字による資料は少なく、生き残った人達の記憶をもとにこれだけのものをまとめ上げた努力にまず敬意を表してかからねばならない。古い知人もたくさん出てきて、なつかしく読んだ。

無診運動は当時のブルジョア医療のあり方の甚だしい矛盾に対して貧しい人々を助けねばと、正義に燃える若い医師達が立ち上った意義は大きく、たちまち各地にひろがったのであるが、一面では少なからぬ欠点を持ち、若もの情熱がたぎって誤ちをも犯した。この本は、先駆者たちをたたえることに力を注ぎすぎたせいか、すべてを英雄視し、美化して、問題への反省が足りないのは遺憾である。

その第一は、技術の未熟さ、軽視である。安からう悪からう、では困る。ないよりまし、では大衆の信頼を得ることはできない。人手も足りないからではあったが、臨床の勉強や経験を積まずに、すぐ診療活動には行って行く人が多かった。

次は、勇ましい政治主義の偏重で、技術の軽視につながる。マルクス主義、社会科学の研究と反権力闘争はさげられないとしても、医療活動より革命への行動が重んじられ、合法と非合法が間もなくこんがらがってきた。すぐ全協の手がのび、一方ではシンパ活動へ引っこんで行った。医療活動はむしろ組織拡大のための

幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は
会員より理事長が任命する。

六、役員任期は二年とし重任を妨げない。(た
だし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会员の中より理事会の
推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は
役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内
(東京都文京区本郷二の一の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設
けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行情日 年四回(一月、四月、七月、十月)末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名

を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。
原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書き
のこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が
行なう。また編集の都合により加除補正するこ
ともある。

著者負担 表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で五

印刷ページ(四百字原稿用紙で大体十二枚)ま
では無料とし、それを越えた分は実費を著者の
負担とする。但し欧文原著においては三印刷ペ
ージまでを無料とする。図表の製版代は実費を
徴収する。

校 正 原著については初校を著者校正とし、二校以後
は編集部にて行なう。

別 刷 別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目の一、順天堂大学

医学部医史学研究室内 日本医史学会

編集委員 大鳥蘭三郎、大塚恭男、蔵方宏昌、酒井シツ、樋口誠

太郎、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂

編集顧問 小川鼎三、A・W・ビーターソン

日本医史学会役員氏名 (五十音順)

理事長 小川 鼎三
 会長 緒方 富雄
 常任理事 石原 明 大鳥蘭三郎
 会計監事 宗田 一

理事 赤松 金芳 阿知波五郎 石川 光昭
 今田 見信 内山 孝一 大塚 敬節
 大矢 全節 緒方 富雄 蒲原 宏
 佐藤 美実 杉 靖三郎 鈴木 正夫
 鈴木 勝 宗田 一 津崎 孝道
 戸近太郎 中野 操 三木 栄
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系

幹事 大塚 恭男 酒井 シヅ 杉田 暉道
 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名 (五十音順)

赤松 金芳 安芸 基雄 阿知波五郎
 青木 一郎 石原 明 石田 憲吾
 石川 光昭 今市 正義 今田 見信
 岩治 勇一 内山 孝一 大鳥蘭三郎
 大塚 敬節 大塚 恭男 王丸 勇
 大矢 全節 緒方 富雄 小川 鼎三
 大滝 紀雄 茂島 四郎 片桐 一男
 川島 恂二 蒲原 宏 金城 清松

久志本常孝 榊原悠紀田郎 酒井 シヅ
 酒井 恒 佐藤 美実 清水藤太郎
 杉 靖三郎 杉田 暉道 鈴木 正夫
 鈴木 勝 鈴木 宜民 瀬戸 俊一
 関根 正雄 宗田 一 高木圭二郎
 高山 担三 田中 助一 津崎 孝道
 津田 進三 簡井 正弘 土屋 重朗
 戸近太郎 中泉 啓正 中川 米造
 中沢 修 中野 啓 中山 沃
 長門谷洋治 藤野恒三郎 服部 敏良
 福島 義一 古川 丸山 邦則
 富士川英郎 三浦 豊彦 三木 栄
 松木 明知 谷津 三雄 山形 徹一
 三廻 俊一 山下 喜明 和田 光胤
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系
 安井 広 以上

文部省科学研究費補助金の交付決定
 昭和46年度より本誌に対して交付されて
 いる文部省科学研究費の定期出版助成金
 が、本年度も25万円交付される旨、内定し
 た。

編集後記

本年の総会は解体新書出版二〇〇年を記
 念して緒方富雄会長のもとに蘭学資料研究
 会と合同で多彩な行事が行われることとな

った。その一環として総会の演題のテーマ
 を解体新書とその周辺に限り、日本の洋学
 の芽生えを探ることとなった。
 本誌の編集も編集陣の強化と金原出版の
 協力により、曲りなりにも発行日に近く発
 行することができるようになった。しか
 し、内容的にはまだ力不足が目立ち、学会
 誌として充実したものであるように一層の
 努力をしている。(S記)

昭和四十九年 七月二十五日 印刷
 昭和四十九年 七月三十日 発行

日本医史学雑誌

第二十卷 三号

編集者代表 大鳥 蘭 三郎

発行者 日本医史学会
 代表 小川 鼎三

〒二三 東京都文京区本郷三丁目

順天堂大学医学部医史学
 研究室内

振替 東京 一五二五〇番
 製作協力者 金原出版株式会社
 医学文化保存会

〒二三 東京都文京区
 湯島二丁目一四

印刷者 五協印刷有限公司
 〒七四 東京都板橋区
 南常盤台一丁目三

Members' Presentations (Abstracts)

- A Western-style Anatomical Book in Japanese
 Before "Kaitaishinsho".....Shizu SAKAI...(1)
- Influence of "Kaitai-shinsho" on "Seisetsu-naika-senyo" (A Book of Western Internal Medicine) ...Toshio OTAKI...(3)
- Considérations linguistiques sur la traduction japonaise de la "Tables Anatomiques"Yoshio SATO...(5)
- "Kaitai-shinsho" and the Prefecture of Echigo
Hiroshi KANBARA...(7)
- Influence of "Kaitai-shinsho" upon the Dissection of Chutaku Sasaki.....Shoichi YAMAGATA...(9)
- "Kaitai-shinsho" and Books of Veterinary Medicine
Shinichi MATSUO...(10)
- A text of "Kaitai-shinsho" found in Hachioji-city
Yoshihisa SHINDO...(12)
- On "Ika-sentetsu-tsuisen-kai" and Lute-poem "Ran-gaku-sooshi" by Dr. Yu Fujikawa.....Kaneyoshi AKAMATSU...(13)
- "Zeevaartkundige Tafelen".....Zensetsu OYA...(15)
- Koan Kuriyama, Gempaku Sugita and Naotake Odano.....Sukeichi TANAKA...(15)
- On Ryotaku Maeno.....Tetsuo SUENAKA...(16)
- On Kozuka-hara and Sanya.....Masao SEKINE...(17)
- Studies on the Beginning of Dutch Learning in Japan.....Koichi UCHIYAMA...(19)
- Footnotes of Kulmus' Anatomical Book and "Revised Kaitaishinsho"Ranzaburo OTORI...(22)
- Über die Ontleedkundigen Tafelen, (III)
 —Vorreden—Hisashi SAKAI...(23)
- The Artificial Porcelain Teeth Firstly Made in France at the Same Time of the Publication of "Kaitai-shinsho" and their Further Development.....Shunichi SETO...(25)
- How People Used "Kaitai-shinsho"Akira ISHIHARA...(27)
- On the "Seisetsu-hakuraku-hikkei" (Western Veterinary Book) Translated from Dutch into Japanese in 1729
Isamu SAKAMOTO...(29)
- New Historical Materials of the Families of Sugita and Nakagawa in Obama-city
 ...Gakei TANABE, Asao KAWAHARA and Shohachiro OBATA...(31)

各学会の雑誌、抄録、プログラム、名簿及び各大学同窓会名簿、
各県医師会名簿などの印刷ならびに広告掲載のお世話を致します

06-943-1511

各医学雑誌の広告を取扱う

福田商店広告部

大阪市東区島町2-26

分室 大阪市東区釣鐘町1-17(橋本ビル) TEL大阪(06)943-1511(代)

医・薬・化

祝 盛 会

廣 告 代 理 店

專 門 取 扱

医 学 ・ 薬 学 ・ 化 学
專 門 雜 誌 ・ 業 界 新 聞

各 学 会 の 雜 誌 ， 抄 録 ， プ ロ グ ラ ム 及 び 名 簿
等 の 印 刷 並 に 廣 告 掲 載 の お 世 話 を 致 し ます

— 本 誌 廣 告 取 扱 —

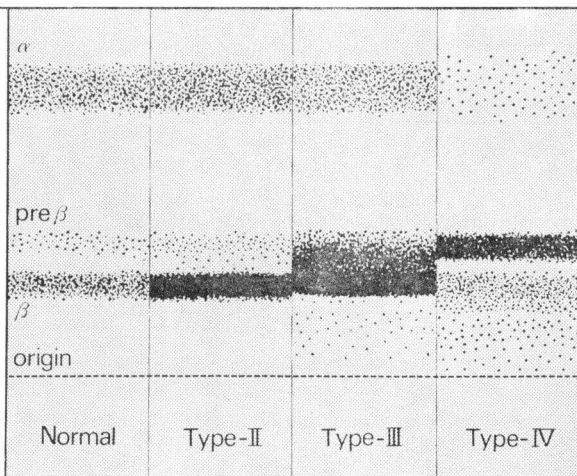
合 資
会 社

日 本 医 学 廣 告 社

東 京 都 千 代 田 区 神 田 駿 河 台 2 - 9

日 本 医 事 新 報 ビ ル

電 話 (03) 292 - 6961 (代 表)



高脂血症の血清リポ蛋白像 (Fredricksonによる)

高脂血症に

● 脂質代謝改善剤

コレソルビン®

(一般名=シンフィブラート) 散・カプセル

コレソルビンは脂質(血清総コレステロール、トリグリセライド、 β -リポ蛋白など)全般の代謝異常を改善し、しかもエスケープ現象が少なく安定した持続効果を示します。さらに、耐糖能を改善します。

原体は結晶性粉末で、製剤は無味・無臭
(ゲップ等の不快な症状がなく、服用しやすい)

当社研究・創製品
健保適用



CHOLESOLVIN

〔包装〕 カプセル(250mg) (コード番号: Y-CL 25)
= 120・600・1500・6000カプセル
散(2倍散)= 100・500g

- (使用上の注意)等については現品説明書をご参照ください。
- 文献等ご要望の向きは吉富製薬学術部(大阪市東局区内)まで。



吉富製薬株式会社

大阪市東区平野門3丁目35番地

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 20. No. 3

July. 1974

CONTENTS

The 75th General Meeting of the Japan Society of Medical History and the 16th General Meeting of the Japanese Society for the Study of Dutch Learning

Articles

- "Ensei ihan" "Ihanteiko" (1).....Ranzaburo OTORI...(233)
Studies on Morita's brothers, Scholars of Dutch
Learning (1)Kazuo HASEGAWA...(242)
- A Glimpse of Ph. Franz von Siebold as Scientist,
from Materials Reported by T. Itazawa...Ichiro YABE...(249)
- On the Demand of "Hu-shi Keiken-Ikun"
(Hufeland's Medical Book) in Ema's School
..... Kazuo KATAGIRI...(258)
- Seisetsu Naika Senyo (5).....Toshio OTAKI...(268)
- Notes from Monthly Meetings**.....(280)
- Miscellaneous**.....(281)
-

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1. Bunkyo-Ku, Tokyo